

篠山市

井ノ上森垣内ノ坪遺跡・宮ノ前向井遺跡・小中追谷口遺跡

# 井ノ上森垣内ノ坪遺跡 宮ノ前向井遺跡 小中追谷口遺跡

—一般国道372号日置バイパス道路改築事業に伴う発掘調査報告書—

兵庫県文化財調査報告 第368号

兵庫県教育委員会

平成22(2010)年3月

兵庫県教育委員会

蘿山市

井ノ上森垣内ノ坪遺跡

宮ノ前向井遺跡

小中追谷口遺跡

—一般国道371号日置バイパス道路改築事業に伴う発掘調査報告書—

平成22(2010)年 3月

兵庫県教育委員会



## 例　　式

- 本報告書は一般国道17号日高ハイウェイ道路改築事業に係る実地試験調査用・丹波土木事務所（但馬山上木事務所）の認可を受けて平成11年度に発掘調査を実施した宮ノ前向井遺跡・井ノ上遺跡内・坪過跡・小川遺跡口遺跡の発掘調査報告書である。
- 兵庫県考古監査官が発掘調査主持となり、兵庫県教育委員会理総文化財調査事務所（立陶、現兵庫県立考古博物館）の遺物監査と拍照正印・松岡千恵が発掘調査を担当した。
- 兵庫県立考古博物館における通則調査番号は下記の通りである。

宮ノ前向井遺跡　　2001年8月3日

井ノ上遺跡内・坪過跡　2001年8月4日

小川遺跡口遺跡　　2001年8月5日

- 遺跡の所在地は下記の通りである。

宮ノ前向井遺跡　　播磨山頂宮ノ前字向井・宇治ヶ原

井ノ上遺跡内・坪過跡　播磨山西ノ上字西垣内ノ坪・上原字原敷・坪

小川遺跡口遺跡　　播磨山西字坪過谷口

- 遺物図の説明は本文、図版、図面を通して統一した。

- 本報告書について、直内が執筆・編集し、編集については青木裕樹氏が同種実績の協力を請け行つた。また、青木裕樹氏には地形分析について協力をいたしました。

- 遺構写真は調査担当者の撮影によるもので、航空写真は写真機ルミニアックス機式公社に撮影嘱託したものである。また、遺物写真については、現口フィットに撮影委託した。

- 図示した序號はすべて座標度を示し、水準はJDPを使用した。図上座標値は厘米値を使用している。

- 整理過の遺物について、兵庫県立考古博物館ならびに同博物館風土文化部に保管している。

- 図表および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導をご教示を仰いだ。記して感謝の意を表するものである。（敬称略）

岸本　哲嗣（立命館大学）・成田　雅彦（播磨山頂考古監査官）



# 本文目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	
第2節 確認調査の実施	
第3節 小発掘調査の経緯	
第4節 整理作業	
第2章 通路の歴史・地理的環境	3
第1節 地理的・歴史的環境	
第2節 漢柵跡周辺の通路	
第3章 宮ノ上森境内ノ坪道跡	7
第1節 通路の立地と遺構	
第2節 土上遺物	
第3節 小坊	
第4章 宮ノ前向外通路	13
第1節 通路の立地と遺構	
第2節 土上遺物	
第3節 小坊	
第5章 小坊道谷の遺跡	19
第1節 遺跡の立地と遺構	
第2節 土上遺物	
第3節 小坊	
第6章 自然科学分析	23
I 小坊道谷1号通路、宮ノ前向外通路および宮ノ上森境内ノ坪道跡の埋蔵環境	
■ 材料 資料（立命館大学埋蔵文化研究所）	
II 宮ノ前向外通路から出土した木片・樹冠遺体の年代	
■ パリス・リチャードソン株式会社	
報告書付録	29

## 写真図版目次

- 国版1 a・道路側面図（西から） b・道路側面図（北西から）  
国版2 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅱ区  
国版3 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅲ区  
国版4 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅳ区  
国版5 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅴ区  
国版6 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅵ区  
国版7 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅶ区  
国版8 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅷ区  
国版9 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅸ区  
国版10 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅹ区  
国版11 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅺ区  
国版12 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅻ区  
国版13 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅼ区  
国版14 井ノ上森境内ノ坪道跡出土遺物  
国版15 宮ノ前向坪道跡出土遺物  
国版16 小中道谷口道跡出土遺物

## 挿図目次

- 第1図 植認調査トレンチ断面図  
第2図 日高ハサハス植生輪廓調査断面図  
第3図 高山苔の収量と過剰の状況  
第4図 地図の地質分類図  
第5図 井ノ上森境内ノ坪道跡調査区配図  
第6図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅰ区全体図  
第7図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅱ区全体図  
第8図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅲ区全体図  
第9図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅳ区全体図  
第10図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅴ区全体図  
第11図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅵ区全体図  
第12図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅶ区全体図  
第13図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅷ区全体図  
第14図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅸ区全体図  
第15図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅹ区全体図  
第16図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅺ区全体図  
第17図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅻ区全体図  
第18図 井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅼ区全体図  
第19図 井ノ上森境内ノ坪道跡出土遺物  
第20図 小中道谷口道跡調査区配図  
第21図 小中道谷口道跡全体図  
第22図 小中道谷口道跡出土遺物  
第23図 小中道谷口道跡 全景（西から） b 全景（東から）  
第24図 小中道谷口道跡 全景（西から） b 全景（東から）  
第25図 小中道谷口道跡 全景（北から） b 全景（西から）  
第26図 小中道谷口道跡 全景（北から） b 全景（西から）  
第27図 小中道谷口道跡 全景（西から）  
第28図 小中道谷口道跡出土遺物  
第29図 调査区周辺の地形分類図  
第30図 小中道谷口道跡における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第31図 宮ノ前向坪道跡Ⅰ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第32図 宮ノ前向坪道跡Ⅱ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第33図 宮ノ前向坪道跡Ⅲ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第34図 宮ノ前向坪道跡Ⅳ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第35図 宮ノ前向坪道跡Ⅴ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第36図 宮ノ前向坪道跡Ⅵ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第37図 宮ノ前向坪道跡Ⅶ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第38図 宮ノ前向坪道跡Ⅷ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第39図 宮ノ前向坪道跡Ⅸ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第40図 宮ノ前向坪道跡Ⅹ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第41図 宮ノ前向坪道跡Ⅺ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第42図 宮ノ前向坪道跡Ⅻ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第43図 小中道谷口道跡調査区配図  
第44図 小中道谷口道跡全体図  
第45図 小中道谷口道跡出土遺物  
第46図 小中道谷口道跡出土遺物  
第47図 小中道谷口道跡における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第48図 宮ノ前向坪道跡Ⅰ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第49図 宮ノ前向坪道跡Ⅱ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第50図 宮ノ前向坪道跡Ⅲ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第51図 宮ノ前向坪道跡Ⅳ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第52図 宮ノ前向坪道跡Ⅴ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第53図 宮ノ前向坪道跡Ⅵ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第54図 宮ノ前向坪道跡Ⅶ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第55図 宮ノ前向坪道跡Ⅷ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第56図 宮ノ前向坪道跡Ⅸ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第57図 宮ノ前向坪道跡Ⅹ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第58図 宮ノ前向坪道跡Ⅺ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第59図 宮ノ前向坪道跡Ⅻ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第60図 小中道谷口道跡調査区配図  
第61図 小中道谷口道跡全体図  
第62図 小中道谷口道跡出土遺物  
第63図 小中道谷口道跡出土遺物  
第64図 小中道谷口道跡における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第65図 宮ノ前向坪道跡Ⅰ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第66図 宮ノ前向坪道跡Ⅱ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第67図 宮ノ前向坪道跡Ⅲ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第68図 宮ノ前向坪道跡Ⅳ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第69図 宮ノ前向坪道跡Ⅴ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第70図 宮ノ前向坪道跡Ⅵ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第71図 宮ノ前向坪道跡Ⅶ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第72図 宮ノ前向坪道跡Ⅷ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第73図 宮ノ前向坪道跡Ⅸ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第74図 宮ノ前向坪道跡Ⅹ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第75図 宮ノ前向坪道跡Ⅺ区における過剰植生からみたトレンチ断面図  
第76図 宮ノ前向坪道跡Ⅻ区における過剰植生からみたトレンチ断面図

## 表目次

- 第1表 井ノ上森境内ノ坪道跡出土遺物一覧表  
第2表 宮ノ前向坪道跡出土遺物一覧表  
第3表 小中道谷口道跡出土遺物一覧表  
第4表 技術性記述年代別統計および昭和校正結果

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経過

国道329号(日東線)西原から加西市・加茂町・鹿山西を経て京都府尾鷲市に至る延長約10kmの一級国道である。西側の谷には一般国道329号の歩道整備が施された。京都市と都路町を縦断で結ぶ道路で、途中、国道5号・京滋バイパス・舞鶴若狭自動車道・国道14号・同15号・中和田自動車道・山陽自動車道・播但通勤線・国道1号に接続する幹線道路である。ことに阪神・淡路震災時には京阪神の道路網の代替幹線として大きな役割を果たした。その後、高速道路網の整備とともに阪神間の代替路線としての認知度の高まりにより、通過トータルの通行量が年々増加する傾向にあった。しかしながら、沿河は漁港本牧や駅前の狭小区間が多いことが問題となり、その解消のために各地の課担当課にて道路改良工事が進められてきた。日置バイパスの建設もその1つで、車道幅員が狭小なうえ、歩道と車道の区別がなく、歩行者の安全と円滑な交通の確保が地域住民から求められていた。この要望を受けて現土賀瀬部和山土木事務所は、改善策を検討し、いくつかの案の車から選択の権限を付与するハイレベル調査を実施した。

この調査を受けて、兵庫県道路整備会は、日置バイパス道路改修事業に伴う埋蔵文化財調査の取り扱いについて、兵庫県教育土木事務所(当時)との協議を行った。事前に歩道幅員の縮窄の分離調査を行うこととなり。分離調査は平成12年10月4日に実施。この結果に基づき、平成13年度に同事務所上から車に通る延長約1.5km区間の確認調査を実施することになった。

## 第2節 確認調査の実施

確認調査は平成13年1月11日㈪、地主の許可を得により実施した。なお、平成12年4月1日の相場改組により、車道主導者は兵庫県教育土木事務所から兵庫県丹波明石局河内整備部西山土木事務所に変更されている。

確認調査の実施にあたっては、調査対象地内に約30m×30m余地あるとする日本の古墳トレンチを設定し、さながら遺物収集者が遺物収集箱が認められたトレンチ周辺に目印を設けた場合で日本古墳トレンチ者と見て、本発掘調査の範囲確定を行った。

この結果、1-1-5・54トレンチ(「上原字御殿ノ坪・井ノ上遺跡」と呼ぶ)、10-1-2・10・11トレンチ(「宮ノ前字高ヶ原・宇阿坪」)、14-11トレンチ(「小字字御谷口」)において遺構が確認されたことにより、この1箇区を対象とした本発掘調査を実施することとなっただ。

調査会社：兵庫県教育土木事務所

總体調査監理：2001年8月、2001年1月3日

調査担当者：兵庫県教育土木事務所 理藏文化財調査事務所(当時)

調査第1期：玉造・別府・御二・猪木・新二

調査期間：平成13年6月1日～7月25日

## 第3節 本発掘調査の経過

第1節において述べた通り、平成14年度の確認調査において、上宿～井ノ上・宮ノ前・小中の1地区で遺構が存在することが判明した。今回の本発掘調査はこの確認調査結果を受けて、平成14年3月18日付外延（約1ha）深さ10cmによる目録調査及び現地調査員からの情報により兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。

なお、各遺跡名について社火字に小字を附加して遺跡名を与えた。このうち、井ノ上森町内・町道路について、上宿平屋敷・坪から井ノ上字森町内・坪にまたがるが、遺構の内裡が井ノ上の地に集中しているので、井ノ上森町内・坪の遺跡名を与えた。また、同道路については、当初、井ノ上屋敷・町道路の遺跡名を与えていたが、屋敷ノ坪は上宿の小字名であり、井ノ上屋敷・町道路とする上宿敷ノ坪が井ノ上の小字であるかのような誤解を与える恐れがあるのです。当初の遺跡名を改め井ノ上森町内・坪道路を正式な遺跡名とする。

調査期間：平成14年3月21日～平成14年3月6日

調査面積：井ノ上森町内・坪道路 1,601m<sup>2</sup>

宮ノ前向井道路 2,000m<sup>2</sup>

小川堀谷口 600m<sup>2</sup>

調査担当：土查・森内・西道・岡・柏原・正民・朝・堀岡・千香

調査協同調査：西本・寿子

## 第4節 整理作業

平成12年度に本溪からトレース・レイアウトの読み書きを行ない、報告書の刊行を行なった。

検査・復元作業：西口・山紀

測量作業：レイアウト担当：岡田・朝穂



図1図 地形図とトレント記測図(1:6,000)



図2 四國八幡駅北側範囲高道路地図 (1:10,000)

# 第2章 遺跡の歴史・地理的環境

## 第1節 地理的・歴史的環境

遺跡が所在する鹿山市は丘陵地の中確認にあり、京阪神との接続を構成する。かつては多紀郡に属し、平成11年に多紀郡福山西町、今里町、西紀町、丹波町の4町が合併し、西紀町が発足された。西紀町の発足は平成の大合併の大きな年となっることで注目を集めた。その合併によって、旧多紀郡を境が轄域となり、多紀郡の名残が消滅した。

西内では縄文時代中期の御園遺跡にて調査によつて縄文時代から弥生・古墳時代にかけての遺跡が豊多く発見されている。西内での代表的な遺跡として、まず邑内で最も大きな跡の西内御園の御園遺跡古墳があげられる。歴史時代の遺跡としては内内城跡や竜門寺などの城跡跡のほか、多紀郡遺跡と確定される東面谷遺跡があり、「郡」の御園のある御園跡が出土している。また、近時御園遺跡跡の鹿ヶ岳丹波大山系の所在地。日本住町には丹波境の生産地としてとして知られている。中河原になると、多紀郡を支配した羅賀氏の居城八上城を中心として多くの城が築かれているが、八上城は羅賀城の築城に点い廢された。現在は羅賀城を中心とする文明圏に属している。

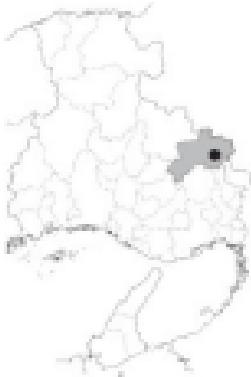


図3図 鹿山市の位置と遺跡の位置 (1:800,000)

## 第2節 調査地周辺の遺跡

今回調査を実施した鹿山西井ノ上～小中川鹿山市域の東端にある。約1.5kmの矢印跡を構成すれば、矢印跡に属り、具身川流域の重要な地に位置する。地形・地理的には北東方向から流下する音山川、南北の三日市川との扇状地に源を発する矢印跡、車から下する辻川の3つの合流点付近を望む地にある。

周辺の遺跡として知られているのが、辻川沿いの御園の日御園に上の木山1号、2号墳、櫛田西・辻川古墳群、大袖寺古墳、鹿山町の南岸に船首古墳群、北嶋古墳群、北嶋ヌガ首古墳群があり、いずれも円墳であるが、時期その他については明らかではない。なお、宝山寺で対植からは七輪鏡が出土している。

周辺の他の遺跡についても、これまで発掘調査がほとんど行われていないので、ほとんど問題が明らかでないが、今回の調査によって、縄文時代後期～弥生時代初期、飛鳥時代から平安時代、さらに鎌倉時代の遺跡の存在が初めて明らかになったことになる。

### 参考文献

鹿山町教育委員会「歴史発見のおさらい」(2002年)

滋賀県「向日八ヶ岳に残る古墳群研究会」「古墳群遺跡と文化財記念」第1号 滋賀県教育委員会振興文化財課古事務所 (2002年)



1. 長城上遺跡內之古墳群	10. 第七號墳	19. 本山東山1号墳	28. 雷家城跡
2. 長城南側遺跡	11. 開各頭古墳群	20. 本山東山2号墳	29. 延慶寺跡
3. 小中關谷口遺跡	12. 開各頭西口古墳群	21. 舊城ノ坪1号墳	30. 王止城跡
4. 鐵工所遺跡	13. 宝地山大墳群	22. 舊城ノ坪2号墳	31. 平內丸
5. 開各頭南古墳群	14. 遠眺火打谷古墳群	23. 大牆頭古墳	32. 遠眺火打谷墳群
6. 那家古墳	15. 遠眺古墳群	24. 仙人塚	33. 那家城跡
7. 開各頭古墳	16. 駱家沟古墳群	25. 交音寺跡	34. 王止城跡
8. 金花頭山古墳	17. 駱家沟遺跡	26. 衡山城跡	35. 駱家沟古墳群
9. 開各頭古墳	18. 駱家沟古墳群	27. 望山城跡	36. 駱家沟北遺跡

圖4 圖 長城附近古墓群 (1 : 25,000)

## 第3章 井ノ上森垣内ノ坪遺跡

### 第1節 遺跡の立地と構成

辻川と森山川の合流点付近に位置し、今回、本発掘調査を実施した3道路のうちで最も西に位置する。また東の森木原遺跡の地形分析にあるように、内路遺跡の地形は内側の山腹を削む辻川流域が形成した小盆地の地形であるもので、北西方向にゆるやかに傾斜している。

調査区は面積約120m<sup>2</sup>あるが、中央部の調査水境に調査区を2つに分け、西側をI区、東側をII区とした。I区、II区ともに発掘調査着手面の地盤は山地で、以前に行われた調査結果により、内側水境の間に約1mの段差ができる。

#### I区

当該地の本家の地盤は、東から西に向かっての緩やかな傾斜面であったが、調査期間によって本家の傾斜地盤が削られ、東西に長い1塊の水境となっている。そのため、傾斜区域は振り下げによって遺物分布層および遺構層が見られる。遺構は傾斜で削られた中間の土壌（SP01）のみで、これ以外に明確な遺構はない。倒し、II区東端の遺構の終点付近を除き多くの遺構が存在したと目認めない。

発見された遺構の終点付近、直距1.2m、深さ0.6mの土坑で、内部から瓦器皿・棒（POT-180）が出土している。

#### II区

調査区は傾斜地盤時の斜面を覆けて存在せず、遺構地盤も地盤改良層による硬化的影響を受けて、遺構の傾斜は容易ではなく、傾化の進んでいない傾斜上で振り下げて傾斜をせがる傾向があった。図って、本家の遺構層をやや振り下げての傾斜であり、本家の傾斜地盤方面の傾斜よりも高い位置にある。なお、調査地区内においては、地盤改良が施され、遺構が残存していない。

#### SP01

調査区の西端で発見された遺構跡である。方位を回りにくする2種の建物があるが、柱穴の切り合いや等から2つの建物は同時に存在したものではなく、1棟は建て替えて残るものと判断し、建て替前後の建物をSP01a、建て替後後の建物をSP01bとした。中庭と門は、ともに程度の振り方の程120.0m前後で、柱穴振り方からの建物はいずれも上階窓の窓枠と傾斜窓枠のみで、時期を看破できるものはなかったが、傾斜窓枠の瓦器皿は全く含まれておらず、建物の建築年代は傾斜前半期以前の時期と考えてよい。倒し、調査地区内の遺構や遺物包合跡からは1世紀後半を過る年代の遺物は出土していないので、建築年代は1世紀後半を上限とする。

#### SP01a

SP10～SP18の柱穴群で構成される南北1間、東西1間の建物跡である。柱間は柱距の実行値が3.0m、東西小折引きについては、北側の柱門付～SP17とSP17～SP18の柱間が2.2mであるのに対して、南側の柱門付～SP14とSP14～SP15の柱間は2.0mと2.4mである。この柱門付～SP16の柱間が東100.0mであることがある。

#### SP01b

SP1aの建物跡に平行して建てられた建物跡である。北側の柱距は3.0m、SP18～SP16の各柱距が3.0m

の南側面は、図8(a)-(8)内斜の構造を切っていることから、傾斜地が傾斜より最も後の距離に建てられた建物であることがわかる。東と西に壁をもつ。奥は1間×1間で梁間1.9m、板間1.9mである。坪数は西面北1間、東西1間の面積である。柱間は南側の幅行きが9.1mであるのにに対して、東西の折行きは、北側の4.97m・折行、8.09m・折行の柱間が1.9m、南側の4.93m・折行、8.07m・折行の柱間が2.9mである。この1.9mと2.9mという不等面積は柱間の4.97mと幅行きの柱間との不等面積に起因する。すなわち、建て替えた時に既存柱間の前面行を軸にして建物を西側に振り面を上手に配置するために、既存柱間の柱間幅がそのまま正面柱間の柱間幅に適用されている。従って、建て替えた時の既存柱間と西と東に並ぶ柱間が追加されただけで柱間の大きさは多少間にあらず。

三

5

SHの北側に位置する十数m以上の建物で、規模は4.15m以上。北側側はさらに調査区間に伸びる。柱間は1.8m、柱式の割り方は円形で直径は6.5~8.5m、南北面からの距離は北端部である。柱頭と柱脚を繋げてし、複数段階も組み込んである。柱式割り方からの出土遺物(いわゆる土蔵器)の細部と前述器具のみで、柱頭を防ぐための小柱頭が見つかったが、腰壁前面の瓦面が完全に剥離していなかった。

104

直線上に都心部～SIPOを北側の移行相図と考え、建物類似相図とした。相図はSIPO～SIPO2、SIPO2～SIPO3、SIPO3～SIPO4、SIPO4～SIPO5である。前2图と後者の2图が異なるので、SIPOが重ねて表示される場合は想定される北側の柱間が西側内にあるので北端に付かないが、一括りの建物を整理しておく。なお、SIPO～SIPO2、SIPO2～SIPO3の2图はSIPOの柱間と同じである。SIPOと柱間も同じくしているので、同一柱間の建物の分離はない。

97

図1(m)面積、图2(0.45m)面積の小網で、南面方向から北西方向に傾ける。理所邊に斜めが織り込まれていて、網内から正面にかん手をもつ種類の糸（糸A）が織こしており、丁度織手糸の丸められた状態の特徴性が見いだす。

三

既存の物理機能に寄与された属性を表すビットである。上端添字は上端面が口座情報を通じた状態で発生した旨を示す。下端添字の算出式は各機能の前段の間に割り取られて算出している。

100

以上2点は、開き式の土坑である。土坑表面は門柱等と上にした木棚で構成されたが、底面を知るためには断面的に観察するか地盤調査が必要である。

## 第2節 出土遺物

### I区出土遺物

3001

出土遺物はいずれも瓦器である。1001は口徑18.0cmの瓦器小口である。口縁の一部を失くすが、ほぼ完形品である。手づり柱による成形で、底盤外側に施による押捺の痕が残る。内面は全面に磨きが施されているが、外側は口縁部周縁のみに磨き残る跡が残されている。1002は口徑18.0cmの輪の底穴で底盤を失く。口縁部はわずかに内側に傾けられ、底盤部や手柱を同時に往上げる。外側は底盤部の多くが底盤が剥離し残存状態の悪い。1003は口徑18.0cm、高さ12.0cmの輪である。底盤に高さ9.0cm、幅1.2cmの外側に膨らむ筋1つ貼り付け造形がつく。口縁部は内側からわずかに屈曲し、底盤は丸く約められる。底盤内側は側方方向の磨き痕がよく残り、底盤内側はソグナテ状の直線文の磨き痕が確認される。口縁部外側は底盤および底盤部を板状工具で磨きを含めた調整を行っている。底盤は成形時の無加工品のみである。

II区

3001

かみりのある罐形器皿の小口（1004）がI区出土している。

3001・3002

1003は口徑21.0cmの土師器皿である。底盤下平を失く。その下部の外側する口縁部をもつ。1004はI区出土上の土師器皿である。左側に直脚が付くが、一方を失く。取っ手は底盤に附して水平ではなく斜めに取り付けられている。口径22.0cm。底盤を失く。底盤外側は底盤に沿う形め方向のハケ目、内面は口縁から底盤にかけて側方向のハケ目調整を行なう。

ビット30

罐形器（1007・1009）、直脚（1008）、直脚（1010）がI区出土している。罐形器皿1007は丸めて口付せ。手なら天井面からわずかに屈曲し外側に開く口縁部をもつ。直脚部はヘチ切り面。細いナメ調整を施す。1008は直脚器皿の腹である。蓮元が不十分で、直脚の上端部のような底感を呈する。直脚外側は側チマ調整、直脚外側はヘチ切り後、軽いナメの調整を施す。直脚脚1010は直脚部は直角的に立ち上がり、底盤には刷り跡は高台が残されている。内外面とも底盤削除されているが、直脚の厚感を残して、磨き等の痕跡は失われている。

直脚器皿1009は直脚純形で、口縁部は樹脂糊状に小さく肥厚する直脚部に形状を呈する。大半の直脚は直脚にあたる。

ビット11・20・29

111・1114とともに土師器皿で、口縁部が多くの形状に外反する。表面は厚誠し、調整は不明である。形状多くある。1114は直脚の糊糊直脚である。内外面とも底盤削除されているが、直脚の厚感を残して、磨き等の痕跡は失われている。

直脚器

1143かみりのある罐形器皿の小口で、1143は瓦片部からわずかに屈曲して使う。1143は罐形器の杯の小口で、底盤と直脚の接合部から底盤全体にヘチ切り調整を施す。1143は罐形器皿の底部である。

### 第3節 小結

前回では比較的平明な面が述べたが、本回は題から1回へ進むやかに進むし、1回の題では複数となる。こうした複数の立場条件から1回では個立地建築物を中心とした遺物群が分離するのに対して、1回での遺物の分布は複雑である。目次においては、掘立柱建物4種を中心とした遺構群を検討したが、建物群の一部は調査区内では目立まらず、調査以外に残る。遺構の分布状況から判断して建物群は古墳施設の南側と北側に偏開しているものと思われる。

建物は4種類に分かれているが、建物主軸方向と柱穴の羅列方向の観測から、880回と880A、880Bと880Cの3つのグループに分けることができる。建物の年代についてでは、第1節で述べたように、1種ともに構築年代の読み手となる遺跡を伴っていない。従って、柱穴の羅列方向は土壇表面に瓦礫が内包されている点と調査地区内から1世紀後半を過る遺物の出土がないという点から小概要年代は1世紀後半から1世紀前半頃という漠然とした時代幅でしか見えられない。ただ、調査区内の出土遺物は、1世紀後半から3世紀にかけての遺物群と12世紀から13世紀までの特徴の遺物群に大きく分けられることから、此程の大まな研究をもつて880と880Aが前者の時期、更則的小さな柱穴をもつ880Bと880Cが後者の時期に該当する可能性はある。いずれにしても、遺構の既存状態が悪く、しかも限られた範囲の中での調査であり、正確な時期を定については調査区周辺分野他の調査に委ねがるを得ない。



圖 5 圖 丹ノ上層組内ノ平面諸面積圖 (1 : 1,000)



图 1 四川上清河内江河段剖面图

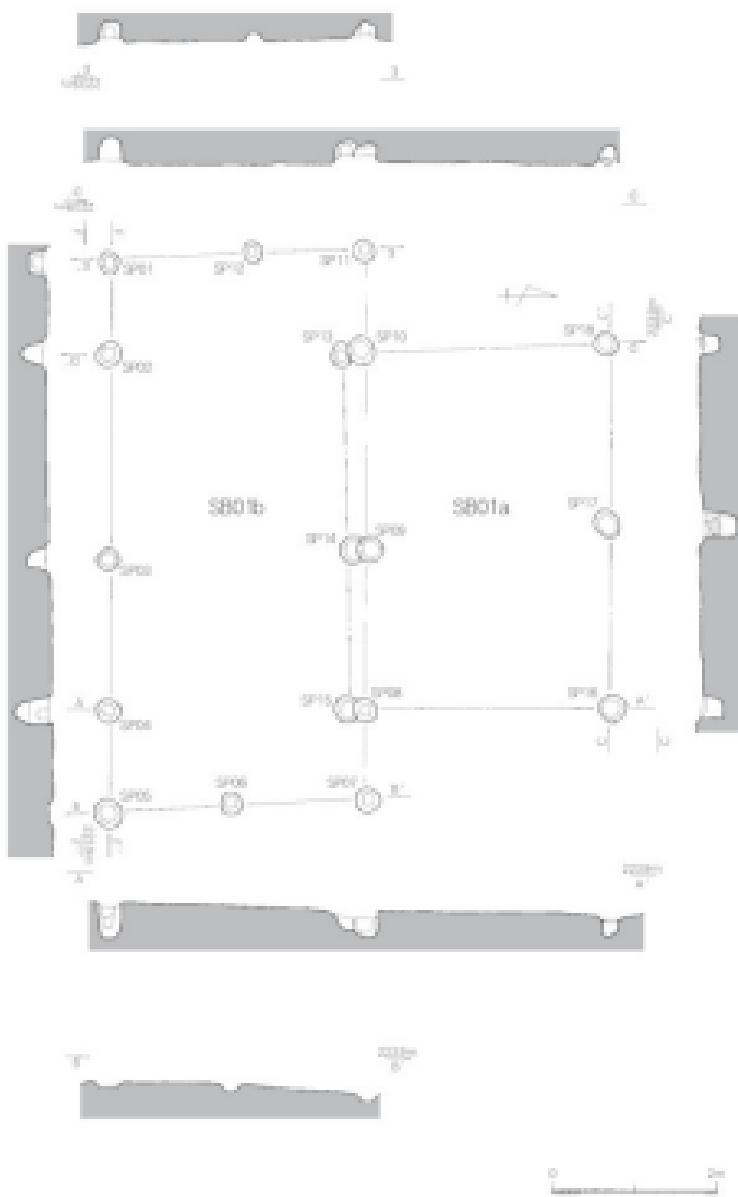


图 7 四川省上西地区深海盆带区 S801

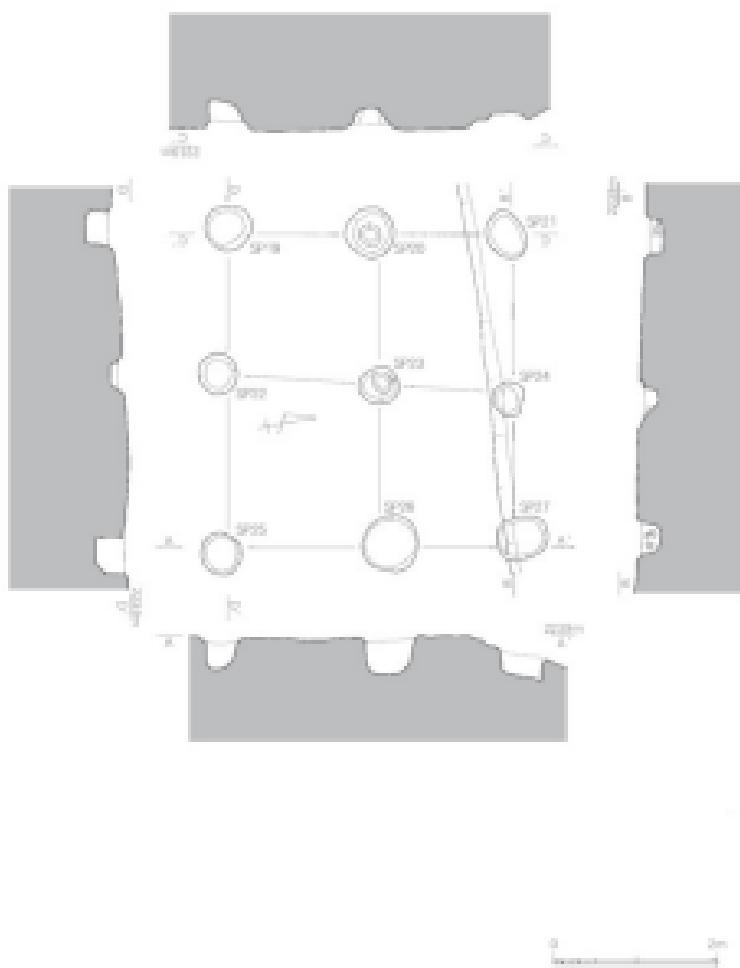
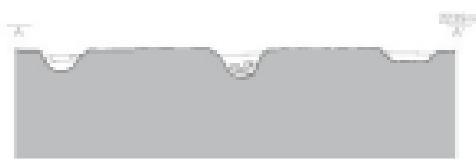
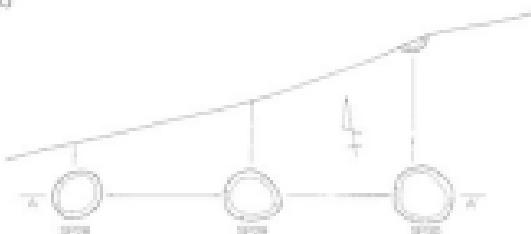


图 1 国 地区 S802

II区 5803



II区 5804

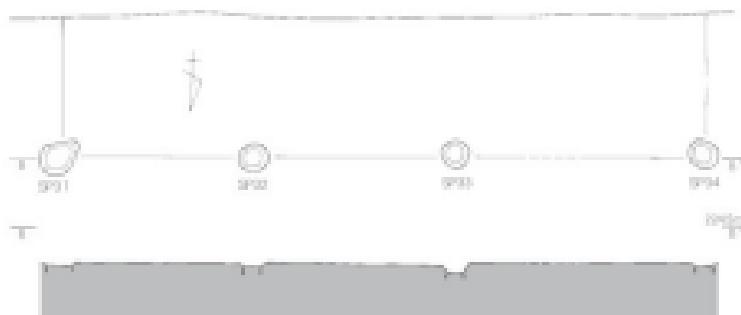
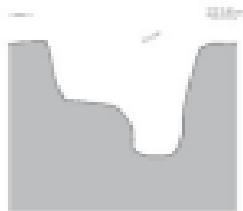
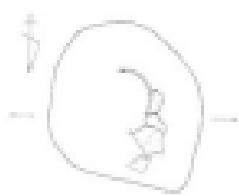


圖 3 圖 丹ノ上槽內ノ鉛錫錫銅 5803 - 5804

II回 SK01



II回 SK02

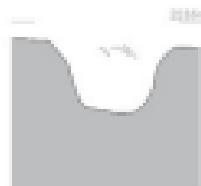
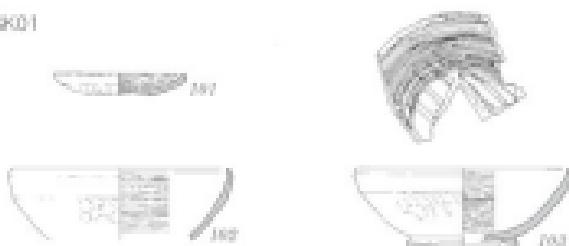
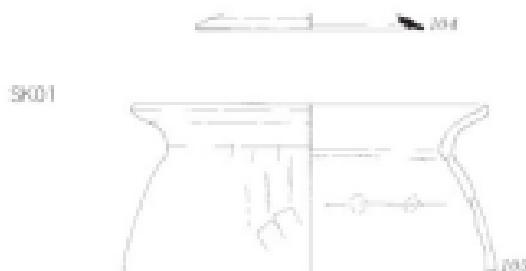


圖10回 井ノ上断面内ノ穿通跡目回SK01・SK02

I 区 SK01



II 区 SD01



SD02

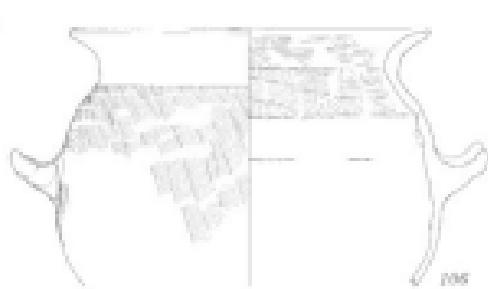


圖11圖 二、三上遺址內之遺物(出土遺物)

II区 ピット跡

ピット 30



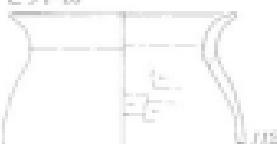
ピット 38



ピット 29



ピット 20



II区 四面磨



図12図 丹ノ上遺址内ノ鉄器類出土遺物 2

# 第4章 宮ノ前向井遺跡

## 第1節 遺跡の立地と構成

遺跡地は辻川本流が形成した扇状地が段丘化した地形上に位置しており、西側の1段と東側の2段・3段に分けて調査を実施した。

### I区

sondage下には約20cmの層厚の砂層を含むシルト層上の埋蔵層があり、その下に砂層を含む砂理層がある。この砂理層をベースとして東西に延びる土坑（S2001・S2002）が検出された。ともにW3.0m×D.0.8m、深さ1.0mを測り、暗灰色のシルト層の埋土中に多量のどんぐりと上面にミクン類が混在していた。砂理層から岡田もしくは仰生時代前期と思われる上部1片より石頭1点が出土していることから岡文もしくは仰生時代初期の可能性が高くと判断し、岡田層と本村の歴史性遺道年代範囲を実証した。竹野の結果は第2章で報告されている通り、岡田層・ミクン割り層とともに京阪広域圏のアカギレ範囲に関する。また、年代層は岡田層が、3箇所の剖面跡、1箇所の剥離土と砂層2箇所を報告されており、岡文時代岡田一帯生時代前期の年代が復活されている。

### II区・III区

Ⅲ区の sondage下にはゼット層や土坑のほか溝が検出された、遺物をほとんど含んでいないので詳細は不明である。また、Ⅲ区の遺物が出土したものの中古を遺物は検出されていない。

## 第2節 出土遺物

### I区

#### 土器（Q201）

円筒の復元もしくは直角形状の土器と思われるが、破片であるゆえどちらかは判断できない。3mm前後の板状を多く含む。表面の剥落が著しく調整の履歴は困難である。

#### 石器（Q202）

I区細角層から出土した陶器式の石器である。圓錐は浅盤付近で検出しており、複数の過程での剥離等により先端部を再加工した可能性がある。石材はモリブドイトで、風化は進んで、長さ17.0mm、幅16.0mm、厚さ3.5mm、重さ0.7kg。

### II・III区

漆器蓋と土器蓋が出土している。漆器蓋には直角と斜角の2種がある。いずれも3世紀代のものである。土器蓋には2種類がある。

### 第3節 小結

前述遺跡からは國文時代～奈良時代初期・奈良時代・鎌倉時代の遺物が出土しているが、遺構についても、本項遺跡ならんに、以前に行われた開墾整備によって削平を受けて、自然な状態では検出されていない。しかししながら、この中で1区で発現された國文時代晚期～後奈良時代初期と思われる遺構の存在が注目される。

遺構は京阪神ではなく、堅田町が認定した土坑2基であるが、既述に鎌倉時代から後奈良時代にかけての堅田町が存在していたことを窺わせる遺構として貴重な発現例である。

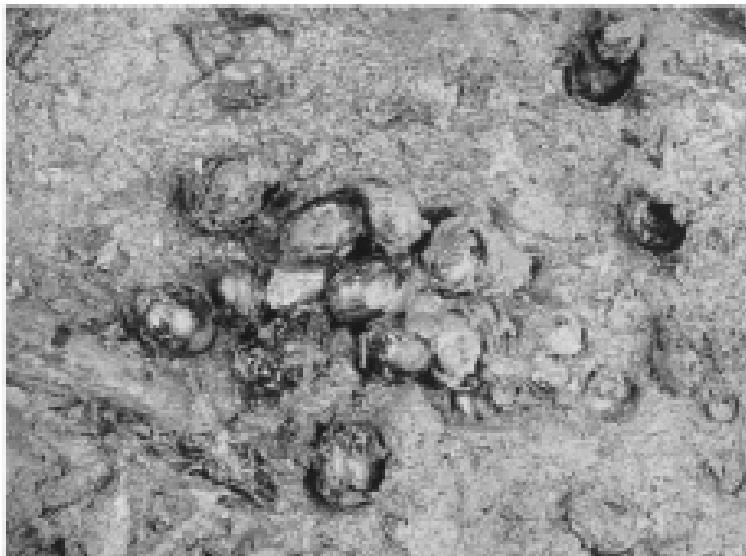


図40 堅田町子法王状況



图33图 潜江内环路快慢道区配图 (1:1000)

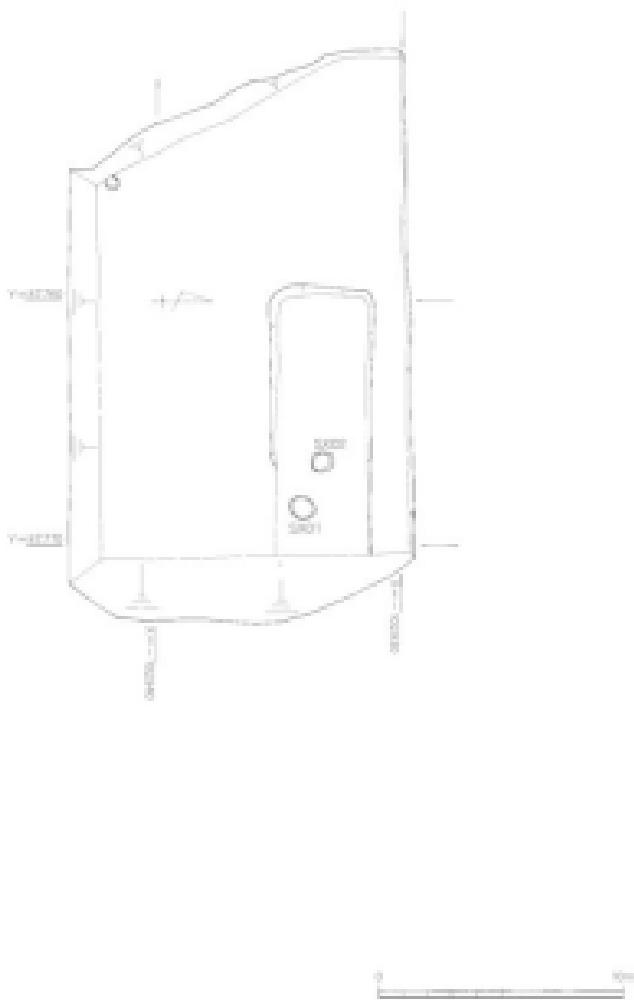
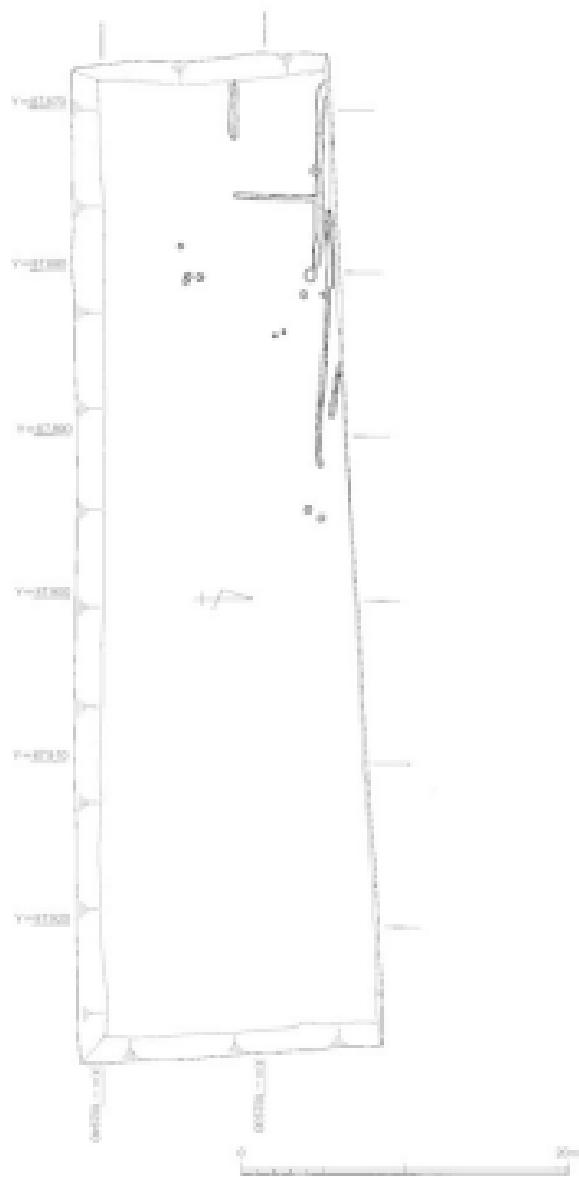
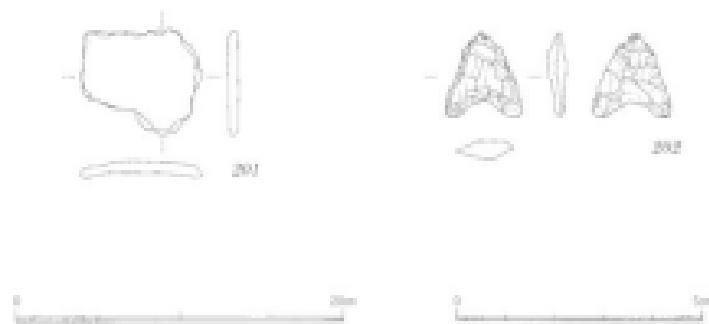


圖24圖 圖24圖內井過熱1圖全形圖



圖五圖 王氏宗祠建築平面圖

I 区



II 区



图162 图ノ前沟井遺跡出土遺物

# 第5章 小中通谷口遺跡

## 第1節 遺跡の立地と構成

以上の通りはずれ隣と並列に接続する程度の複数施設である。前を東、青木哲哉氏の地形分析にあるように、内通谷口の東西に特徴的な山地を想ひ社河底流が形成した支流水系の河床が発達したものであるが、既存の開拓地図によって大きく地形が変化している。とくに西側開拓区では通路の拡張が実行され、通路の多くが実現されている。

### S801

東西1間、南北2間の矩形の建物である。このうちS801とS802の間に最も多くの柱穴（S801次第）が存在するはずであるが、検出できなかった。これ12柱穴の圍り込み深さが浅く、水田開拓時に削平されたとしてもと思われる。柱間は約1.8mを標準とするが、西側開拓区門柱は柱間距離を適て詰められて設けられたためS801-S802が狭く、また、西側開拓の柱間は既存地に詰められて急激にS801-S802の間が広くなっている。

S801-S802の柱列とS801-S804の柱列の間隔が1.8m前後と狭い。柱とみなしておく。また、S801-S802の柱列同士S801-S802の柱列同士の間にS803とS804の柱穴が検出されているが、通廊の柱列の位置にはない。

柱穴の幅り方の大きさは0.6km-0.8mである。掘り込みの深さは深いもので1.8mあるが、浅いものは0.6-0.8mしかない。水田開拓時に削平されたと思われる。掘り出し方から高層および複数層が出土している。且つは建設時代の年代が異なるもので、建物群は其層の年代と同時期がもしくは後後の時代に屬することになる。

### 圓筒ビット群

直径10cm程度の10個程度のビットが削平を施して残していった。各ビットの直径0.5cm程度である。建物の柱頭とすれば、既に廻同する柱頭であるが、圓筒ビット群より此例は削除をうけて残存しないので、残存ビットのみでは建物群を復元することはできなかつた。

## 第2節 出土遺物

### S801

#### 瓦器

S801-S802-S803-S804-S805-S806-S807-S808-S809-S810の遺跡はいずれも廻である。S801は口徑11.6cm、高さ4.0cm、口部縁部外側のみ縫合が認められる。表面で口縁部はやや不規則で、外縁は直線的である。高さは低く、外方に開いた形である。縫合部は斜面で、内外面ともに縫合部はなされているが、外縁部が剥落しており、いわゆる瓦器土器に近い。縫合部には開口、外方に開いた窓口が貼り付けられている。S802の口縁部は不規則で歪んでおり、縫合部は口部縁部により縫合している。内外面ともに縫合部はなされているが、縫合の跡跡は口縁部外側と外縁の一部に残るのみで他は剥落している。S803も底部を欠くが、S802と同じ縫合部の跡で、口縁部外側を巻いて縫合させている。内外面ともに縫合部はなされているが、縫合による外縁部もよく残っている。

S804-S805-S806-S807-S808-S809-S810の口縁部を欠く。内外面ともに縫合部はなされているが、外縁部が剥落しており、いわゆる瓦器土器に

近い。頭骨とものに顎蓋の範囲である。頭骨は枕面で、下面上面に近い。外面上に歯突頭化されていても、内面は歯化が認められない。頭骨は根尖黒化され、唇側による走行がよく感る。内面には横方向の溝が頗るである。頭骨は口唇部のみの範囲。内面全体と口唇部外縁面に感る。内面に歯突の一部が認められる。

頭骨の底面を大きく、口唇部2cmの小頭である。内面はとも歯突黒化されており、内面に地元を残す。

#### 頭蓋骨 (C66)

頭蓋骨の片耳側で、底面内面に骨刺跡跡を残す。底面外縁に1cm幅の骨切り面を残す。

#### 土器器 (C65・C66)

C65は直径1.6cmを測り、口縁部を欠くので、蓋ふぶき不明であるが、一孔器とみなしておく。底面外縁に指押された痕跡を残す。C66は手づくぬの小頭である。

### 包含層

下層 (C12～C16)・上層層 (C17～C19)・中層 (C17)・頭蓋骨 (C66)がある。このうち、C17は中層の口唇部断片である。口唇部は複数の形状を呈しており、大約的層準M層にあたる。

## 第3節 小精

自然遺跡は丘陵と山間に残された複数の程度の荒廃地にあるが、開拓よりも一段高い位置にある。開拓等の痕跡もなく、既往地としては良好な土地条件をもつ。しかしながら、以前に行われた園芸園圃によって、遺跡地の地盤が大きく切り下げられて、遺構面の太平が失われており、抽出された植物遺物は50%とのみであった。但し、このほかにも建物跡が存在したであろうことは、からうとして残存した西側ドット群の存在からもわかる。

遺跡の各種の発掘から甚多の土器片が出土した。出土土器は少種の植生器、土器器の目か皿灰皿が主流である。白土灰皿の年代はこれまでの耕作地での発掘標から植生時代前半期に比定され、遺物の年代は、柱穴掘り方からの出土という点を考慮すれば、植生時代前半を上限としてそれ以降となる。

#### 参考

岡崎 喜連・山田 浩輔著「河原遺跡」 1989年 愛知県教育委員会

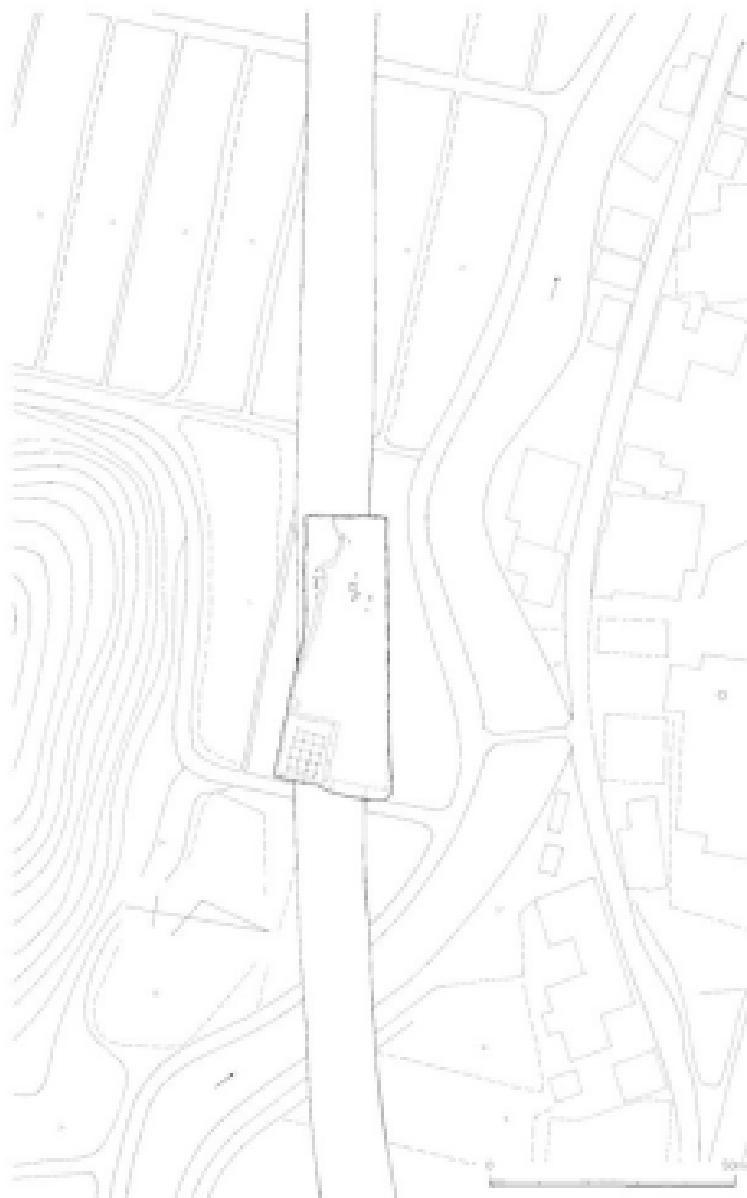


圖13圖 小中港各口 週缺調查區範圍圖 (1:1萬尺)

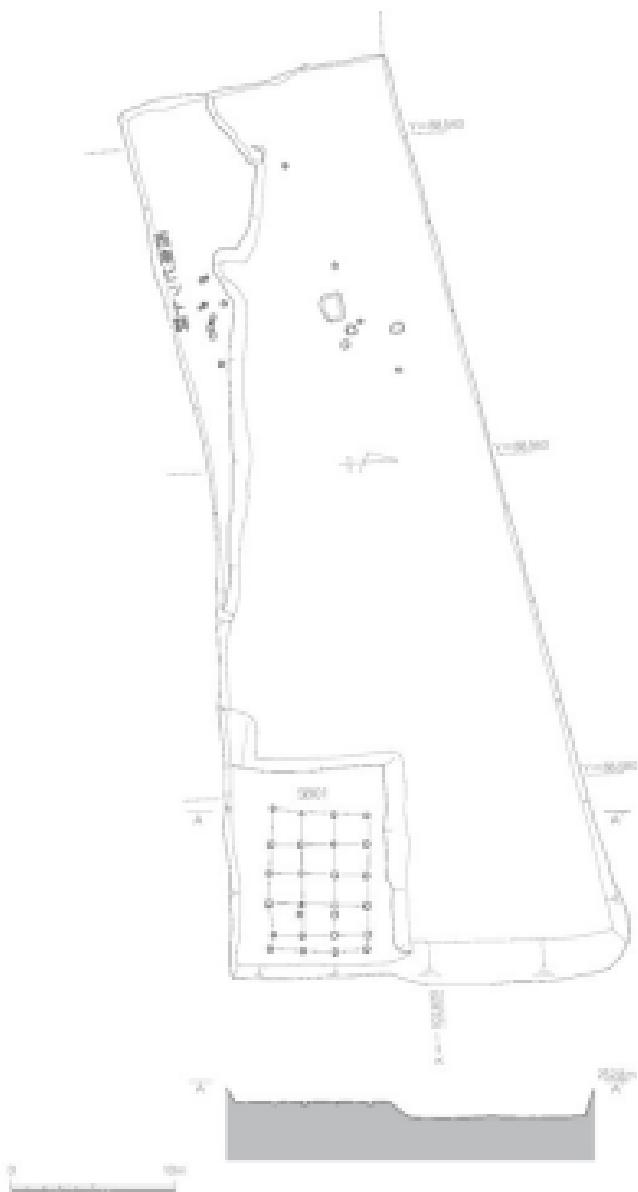


图134 小中禹口水库全图

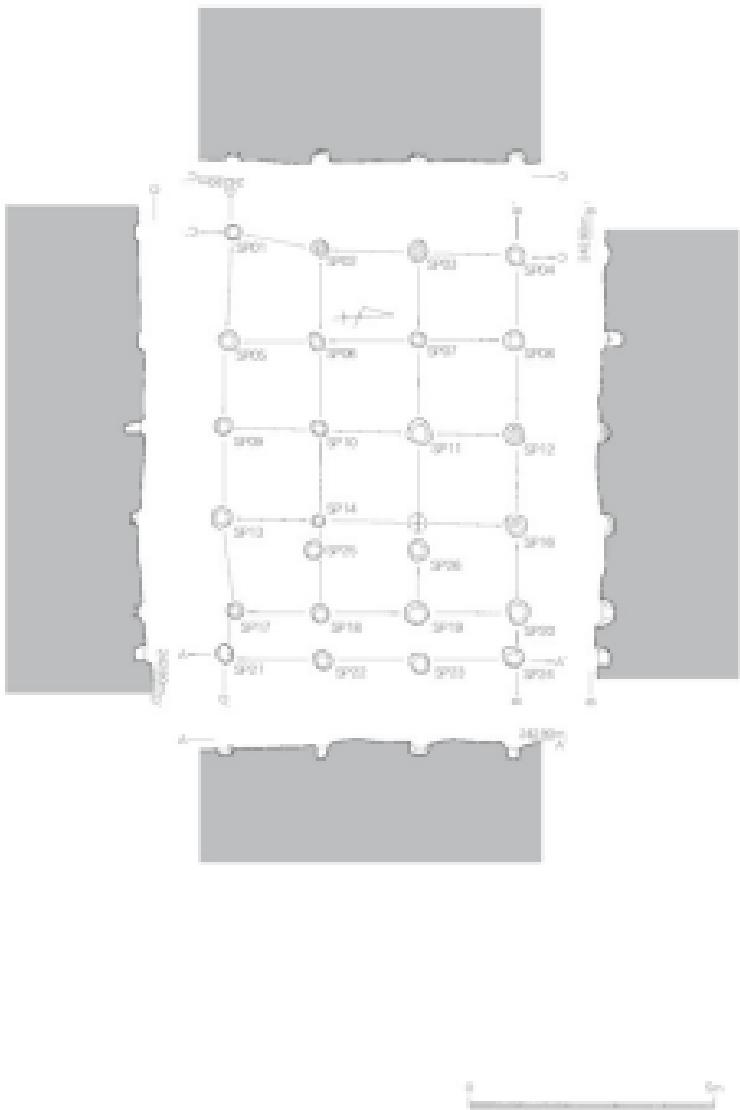


圖14圖 小中壩河口過場S201

SP11

SP12



SP14



SP15



SP20



SP21



SP25



### 包盒器



图26图 小件器物口沿及出土情况

包含層



圖21圖 小牛頭谷石門段土質剖面 2

第1表 拝ノ上遺跡内ノ埋造跡出土遺物一覧表

番号	種別	器種	量積 (Gm)			地図	出土遺物	備考
			目録	表面	底面			
101	瓦類	小皿	8.8	3.2	—	E区	陶片(5.5 Gm)	
102	瓦類	陶	123.31	14.41	—	E区	陶片	
103	瓦類	陶	123.31	4.8	118.90	E区	陶片	
104	瓦類	平皿	123.31	12.01	—	E区	陶片	
105	土器類	陶	21.1	10.01	—	E区	陶片	
106	土器類	陶	22.1	12.01	—	E区	陶片	
107	瓦類	陶	123.31	12.01	—	E区	陶片	
108	瓦類	皿	123.31	3.2	—	E区	陶片	
109	瓦類	陶	123.31	12.01	—	E区	陶片	
110	瓦類	陶	123.31	8.0	113.30	E区	陶片	
111	土器類	陶	123.31	12.01	—	E区	陶片	
112	土器類	陶	123.31	12.01	—	E区	陶片	
113	瓦類	—	—	10.01	10.73	E区	陶片	
114	瓦類	陶器	123.31	12.01	—	E区	陶片	
115	瓦類	陶	123.31	2.8	—	E区	陶片	
116	瓦類	陶	—	10.01	—	E区	陶片	

第2表 宮ノ前向井遺跡出土遺物一覧表

番号	種別	器種	量積 (Gm)			地図	出土遺物	備考
			目録	表面	底面			
201	土器	陶片	品 17.50	品 16.50	—	E区	陶片	
202	石器(礫石陶片)	石器	品 17.55	品 16.00	陶片	E区	陶片	品 17.50
203	瓦類	瓦類のつらぎ	—	0.80	—	E区	陶片	
204	土器類	小皿	0.00	0.2	—	E区	陶片	
205	瓦類	陶	—	0.01	0.00	E区	陶片	
206	土器類	陶	—	0.41	0.36	E区	陶片	

第3表 小中造西口遺跡出土遺物一覧表

番号	種別	器種	量積 (Gm)			地図	出土遺物	備考
			目録	表面	底面			
301	瓦類	陶	123.41	4.0	114.00	E区	陶片 EPI1	
302	瓦類	陶	—	—	—	E区	陶片 EPI2	
303	瓦類	小皿	19.21	—	—	E区	陶片 EPI3	
304	瓦類	陶	123.41	—	—	E区	陶片 EPI4	
305	瓦類	瓦片	—	—	0.11	E区	陶片 EPI5	
306	瓦類	陶	123.41	—	—	E区	陶片 EPI6	
307	瓦類	陶	123.41	4.2	12.96	E区	陶片 EPI7	
308	土器類	陶	—	—	0.00	E区	陶片 EPI8	
309	土器類	陶	0.00	0.2	—	E区	陶片 EPI9	
310	瓦類	陶	123.41	—	—	E区	陶片 EPI10	
311	瓦類	陶	123.41	4.2	12.43	E区	陶片 EPI11	
312	瓦類	陶	123.41	—	—	E区	陶片 EPI12	
313	瓦類	陶	—	—	0.33	E区	陶片 EPI13	
314	瓦類	陶	123.41	—	—	E区	陶片 EPI14	
315	土器類	陶	123.41	—	—	E区	陶片 EPI15	
316	土器類	陶	123.41	—	—	E区	陶片 EPI16	
317	瓦類	陶	123.41	—	—	E区	陶片 EPI17	
318	瓦類	陶	123.41	—	—	E区	陶片 EPI18	

# 第6章 自然科学分析

## I 小中道谷口通路、宮ノ前向井遺跡および井ノ上森垣内ノ坪遺跡の地形環境

内本 哲哉 (立命館大学法政学部准教授)

### 1.はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間に直接的な関係が存在する。地形環境は、東西紀に変化を経て、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、既存理や既存データで容易に得てなく、東西の範囲からデータで捉える困難さが多い。これに反し、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、複数の断面や堆積物の詳細な区分ができる、地形環境を細かいオーダーで復元できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されたため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の調査区では、地形環境と人間生活の接続性についても洞察できるのである。

本稿では、池山盆地東部に位置する小中道谷口通路、宮ノ前向井遺跡、ならびに井ノ上森垣内ノ坪遺跡の地形環境を明らかにしたい。調査では、空中写真の判読と現地踏査にもとづいて地形を分断するとともに、各遺跡の調査区で地理的の觀察を実施した。地形分類は10,000分の1空撮写真を用いて行った。また、堆積物に関しては、透視鏡測定より上位のものだけでなく、そこから剥離したトレンチ断面で堆積物付近の堆積物を観察した。こうして得られた地形と堆積物の調査結果を発掘調査の成果を加えて、調査区付近における地形環境の考察を行った。

### 2. 小中道谷口通路について

#### (1) 調査区付近の地形分類

本遺跡の調査区は鹿山盆地東部で池山町に位置する近世流域の平野に位置する。周囲には山地が併存し、平野は既往する川筋に沿ってほぼ東西に延びる。そこには、便路や駁道がみられるが、便路駁道、現地道路、および支流河床状地が認められる(図四〇)。これらのうち、調査区は近世河床にみられる支流河床状地の河床附近に位置する。

支流河床状地は、山地に分布する小規模な畠地で、面積の山地を刷む事から堆積物が堆積されてつくられる。調査区周辺では、この地形が近世の海岸で比較的よく発達している。これらは平野および盆地底地の地理的条件から河床へ面を下げ、支流河床と接する位置で形成する。ただし、支流河床状地と支流河床の境界は約1~3年前の河床整備によって明瞭でない。調査区はこうした支流河床状地の地理的条件にみられる。

#### (2) 調査区にみられる堆積物の特徴

調査区では、下位から順に灰褐色のレッド頁岩層(第四紀の堆積物II)、黄灰白色の砂(第四紀)、黄灰色の砂砾(第四紀)、黄褐色砂砾(第四紀)、黄褐色のシルト頁岩層(第四紀)、黄褐色の砂礫層(シルト)(第四紀)、黄

灰色の砂質のシート（同19）、暗褐色の砂礫（同20）、灰褐色のシート（同21）、白色の砂礫層（シート）（同22）、暗褐色のシート（同23）、ならびに樹幹土・土壌が認められる（深部層）。これらの中うち、透視斜面は植生状況のシート（同1）の上面であり、調査区西面ではそこから日昇紀の砂質植物（直神）跡が露出されている。

個域色のシート質砂礫（同21）より下位は植生地帯植物に相当する。これらは土に接觸からなり、その間に隙間が少く河床に付着する。とくに調査魚の砂礫（同21）は、10m～20cmの根肉瘤を主体とし、根3cmの目盛りを有す。これらの根肉瘤は植生地帯の根肉瘤である直中野を構成するものにあたる。

調査魚の砂礫（同21）より上位は、扇状地を被覆する植物で、調査区西面を除いて約1mの厚さをもつ。これらは、流水に伴ってもたらされたものであり、茎にシートや砂質シートなどがある。

中でも、灰褐色のシート（同23）は土壤化が遅く固い地盤である。厚さが約30cm前後あり、風化層において透水となっていことが知られる。こうした砂質風化層には、暗褐色の砂礫（同21）が部分的に露出される。これは扇状地植物より少く（約1～5cm）の根肉瘤を主体とする。

## ② 地形開拓の範囲

これまで述べた地形と地植物の特徴から次のようないずれかの地形開拓が考察される。

〔ステージ1〕 調査区北面では、南側の谷から湧水が発達も発生し、谷側や斜面が侵食した。これによって比較的堅固な砂礫堆が発達していった。その他の、調査区北面に直中野が形成された。

〔ステージ2〕 調査区南側の谷から砂礫層にシートや砂質シートがもたらされ。これらが扇状地を被覆していった。その後も侵食が間歇的に繼續し、調査区南側の河岸は侵食した。

〔ステージ3〕 調査区北面では、シートの砂礫層に湧水の發達も認めた開拓地が認めた。この開拓は比較的古い開拓にわたって焼き、直土であったシートの土壤化が著しく進んだ。その結果、灰褐色のシートが生成された。

〔ステージ4〕 砂礫層にシートやシートが開拓に上って埋積し、日昇紀にからて埋て埋設した。日昇紀になると、わずかに高いこの埋設地に植生地帯が置かれた。

## 3. 宮ノ原開拓地跡【～Ⅲ】について

### Ⅰ) 調査区北面の埋設地帯

この開拓の【～Ⅲ】は江戸南岸の支脈段丘に位置する。辻川沿いの平野（沖積地）は完新世段丘と埋没段丘に分けられる（深部層）。完新世段丘は発達がよく、平野の大部分を占める。埋没段丘は、下段～中段にかけて現れ、埋没段丘との境界には比較的1mの高差層が認められる。極力、埋没段丘は、最も低い埋設面で、湧水時に灌水の危険性が高い。これは辻川の流路に沿って断続的に分布する。ただし、辻川植物では、開拓段丘による人工改変のため、開拓段丘の分佈が極めて不規則になっている。

調査の西面の開拓段丘段。長尺堤河によって形成された埋没地が設置されたものである。そのため、埋設地でみられる風化層のうち、埋没段丘河が1区の中央部から西側にかけて伸び、埋没段丘段の末端が認められる。1区より約100m上流（北）に位置する1区とその東側に隣接する2区では、風化層の状況が異常としない。おそらく1区と2区東半部は埋没段丘河上に、また2区西半部は埋没段丘河上に位置すると認定される。

## ⑥ 調査区における堆積物の構造

### ① Ⅰ区の堆積物

Ⅰ区では、下段から黄褐色のシート質砂層（第2回目の堆積物）、黄褐色のシート（同3）、褐灰色の砂層（同4）、黄褐色のシート、ならびに泥炭土・礫土が認められる（第2回目）。ここで黄褐色地盤は現地盤の下位にみられる黄褐色シートの上面であり、Ⅰ区堆積物では開成時代初期～發生時代初期の砂層（E3000・E31）が其上部にあてられている。

黄褐色のシート質砂層（同3）は現状地の既存河床堆積物にあたり。これは河床からE3000の堆積物を主体とする。その上位に認める黄褐色のシート（同2）、褐灰色の砂層（同4）、および黄褐色のシートは現地盤を覆う堆積物である。これらのうち黄褐色シート（同3）の上面からは、Ⅰ区の中央部から西側を通る旧河道が認められる。これは、既往の成層跡と確認され、厚1～2cmの堆積物からなる黄褐色の砂層（同2）に埋没されている。

開成時代初期～發生時代初期の砂層（E30）はこのような埋没河床跡と埋没河道の境界付近に分布する。暫定河跡堆積土の下位に認める黄褐色シートを削ってつくら見ており、その表面を覆める堆積物からは現れと核が検出されている。これらはそれぞれ发生初期の100yrBP (Beta-138175) と1,000-1,400yrBP (Beta-138176) の放射性元素年代測定結果を示す。

### ② Ⅱ区の堆積物

Ⅱ区で確認された堆積物は、下段から間に褐灰色の埋没地に形成シート（第2回目の堆積物）、黄褐色の砂層にシート（同6）、黒褐色のシート（同5）、灰色のシート（同4）、褐灰色のシート質砂層（同3）、黄褐色のシート（同2）、灰褐色のシート（同1）、灰褐色のシート（同1），および泥炭土・礫土である（第2回目）。これらのうち、褐灰色シート（同2）の上面が堆積地盤面にあたり。

最も下位にみられる褐灰色の埋没地に形成シート（同1）以降には、現状地を構成する砂層が存在すると思定される。Ⅱ区で確認された堆積物は、この現地盤を覆うもので、ほとんどが現地盤堆積物である。中でも褐灰色のシート（同5）は、20～30cmの厚さがあり、深水による埋没地盤に土壤化された旧高土にあたる。このシートは小中道谷の通称の霞谷区で認められる灰褐色のシートに連続する可能性がある。さらに上位にみられる褐灰色シート質砂層（同3）は、堆積地盤物の間に位置するもので、Ⅱ区北端に断続的に分布している。縦は厚1～2cmの堆積物を主体とする。

### ③ Ⅲ区の堆積物

Ⅲ区では、下段から黄褐色の砂層（第2回目の堆積物）、黄白色のシート（砂層）、灰褐色の砂層シート（同3）、黄褐色のシート（同100）、褐色のシート（同8）、黄褐色のシート（同1）、灰褐色シート（同5）、褐灰色のシート質砂層（同4）、灰褐色のシート（同1）、灰褐色のシート（同2）、泥炭土、ならびに礫土（同1）が確認される（断続的）。堆積地盤は灰褐色のシート（同1）上面である。

黄褐色の砂層は前段地盤物に該当する。これは、少なくとも1.5mの厚さをもち、Ⅲ区の全幅に亘る。堆積層1～3cmの堆積物を主体とする。これより上位の堆積物は、基本的に現状地を構成するものである。全体の厚さが約1mで、多くが現地盤堆積物にあたる。

Ⅲ区西端では、これらのうち黄褐色のシート（同8）・灰褐色のシート（同1）をそれぞれ認む旧河道が認められる。前者の旧河道は幅およそ10m、深さ約10cmで、既往は幅3m以上、深さ約20cmである。両者共、ともに地盤に残る小規模な成層跡であり、堆積物の谷から流下する走向の成層跡と考えられる。これらは、頂3cm以下の堆積物からなる灰褐色の砂層（同1・9）によって埋没され、さらにその上部褐色のシート（同8）から灰褐色のシート（同1）までの堆積物に覆われる。この灰褐色

シホト（図2）が成なるシホト（図2）の土壤化によって形成された地盤土である。これはⅡ区でもみられる黄褐色のシホト（第四紀の堆積物5）につながると考えられる。

#### ④ 地盤環境の変遷

これまでの事柄から復原される地盤環境は次のとおりである。

〔ステップ1〕 調査区附近では、辺境によって堆積がもたらされ、扇状地が発達した。この時、Ⅰ区周辺からその範囲にかけて冲積が形成された。

〔ステップ2〕 扇状地の扇端部、辺境の氾濫によってシホトや砂質シホトが扇状地上を覆った。そのため、扇状地は埋没した。

〔ステップ3〕 Ⅰ区では、扇状地上を覆ったシホトを切って辺境の氾濫が形成された。また、Ⅲ区の西半部にも、南の源から流れ来る小規模な支流が扇状地を覆うシホト上を流下した。この流域が埋積され、さらにシホトの堆積によって埋没した後、Ⅲ区西半部では再び浸食が発現した。

〔ステップ4〕 調査区附近では、砂質やシホト砂質、シホトなどの堆積が辺境の氾濫によって形成された。これによつてⅠ区とⅢ区西半部の辺境地帯は埋没した。

〔ステップ5〕 Ⅲ区とⅣ区でシホトが埋積した後、調査区附近は根本の起らぬい安定した環境地になった。こうして埋積下でシホトが土壤化し、Ⅲ区とⅣ区では埋積・陥没地のシホトが形成された。

〔ステップ6〕 辺境の洪水が増加し、Ⅰ区とⅢ区ではシホトが埋積した。その後1500年前ころになると、Ⅰ区では人間活動がもたらされ、埋没した辺境地と辺境地の境界付近に防護堤がつくられた。

### 4. 井ノ上自然内ノ埋蔵跡1. Ⅰ区について

#### (1) 調査区付近の地形分佈

本調査のⅠ・Ⅲ区も辺境地帯の完新世地理に位置する(第四紀)。そこは、西ノ面舟井埋蔵跡(図上り約300m、下流(西))にあたり、辺境地が比較的広く発達している。Ⅰ区では、東半部に埋積田中耕が、また西半部に埋没田地帯が分布し、その東西に隣接するⅢ区東上に埋没田中耕地に位置する。

#### (2) 調査区における堆積物の構造

##### ① Ⅰ区の堆積物

Ⅰ区における堆積物は、下伏から順に黄褐色の砂質(第四紀の堆積物1), 黄褐色のシホト(図8), 黄褐色の砂質層(シホトシホト)(図9), 黄褐色のシホト(図10), 黄褐色のシホト砂質層(図10), 黄褐色のシホト(図11), および礫網土、埴生である(第四紀)。これらのうち、黄褐色シホト(図1)の上面が堆積地盤面であり、Ⅰ区北東面ではそこから第四紀の土壤が噴出されている。

黄褐色の砂質(図9)は、扇状地堆積物で、風化帶を構成するものである。これはⅠ区の東半部に分布し、上面は東に凸かって高くなる。埋没地5~7cmの裏面を走体とする。この砂層より上位の堆積物は、扇状地を構成するもので、5~7cmの厚さをもつ。これらの層もシホトであり、その間にシホト砂質層が2つはきまねる。そのうち上位の黄褐色シホト砂質層(図10)は、断続的に分布し、上に5~7~3cmの裏面となる。これは扇状地堆積物に比して砂層の小さい層を上部とする。

Ⅰ区の西半部では、辺境の氾濫地が2つ認められる。ひとつは、Ⅰ区西半部の辺境全幅を通る辺境地で、黄褐色シホト(図10)の上面から切り込み。これは灰黄色と黄褐色のシホト砂質層(図9・10)に埋積されており、灰黄色のシホト砂質層(図7)はⅠ区東半部の砂丘斜面上にまで埋理が及ぶ。もう一

つの断面道は、その断面通過地植物を切って削成されたもので、1区の西端に分布する。これは暗褐色のシルト質砂礫（図5）に埋積される。いずれの断面道も断面地盤上の層かがあり、前者については低い層をもつことが確認されている。

#### 4) 1区の植物

1区では、下段から灰色のシルト質砂礫（第2段の植物物）<sup>1)</sup>、暗褐色のシルト（図10）、黄褐色のシルト質砂礫（図10）、灰褐色のシルト（図10）、暗褐色の砂礫（図10）、黑褐色のシルト（図5）、暗褐色の砂礫層とシルト（図4）、暗褐色のシルト質砂礫（図11）、オリーブ褐色の砂礫層と砂質シルト、黄褐色のシルト<sup>2)</sup>などびり現れ土・底生水草もある（第2段）。そこでは、過耕地表面の層かが暗褐色シルト質砂礫（図5）の上面である。そこからは、19世紀末～19世紀の獨立耕種地跡が2種と、19世紀の独立耕種地跡が複数出されている。

暗褐色の砂礫（図5）より下位の層は19世紀の独立耕種地の堆積物を構成するものに相当する。これらは、主に砂礫やシルト質砂礫で、間に厚さ20～30mmのシルト層はかかる。砂礫とシルト質砂礫に含まれる砂質層<sup>3)</sup>～表層の砂礫層を除くと、表層部の暗褐色砂質砂礫（図5）は1区である他の暗褐色の砂礫（第2段の層理物）に連続する。1区の東側や西側には、この砂礫（第2段の植物物）を切る断面道が認められる。これは、幅約0.4m、深さ約20mmの小規模な断面道で、南の山脚から河下する夷崎の断面跡と考えられる。この断面は、幅2m以下の大規模な断面を呈する暗褐色の砂礫（図5）と暗褐色のシルト質砂礫（図7）、および灰褐色の砂礫層と砂質シルト（図5）に埋積されている。

暗褐色のシルト（図5）から暗褐色のシルト質砂礫（図5）までの層は砂礫層を覆う堆積物にあたり。厚さは30～50mmである。これららのうち暗褐色のシルト（図5）は、土壤化の進んだ耕表土で、1区の西端にみられる。この層理物は19世紀末耕種地と19世紀に被覆される暗褐色のシルト（第2段の植物物）や灰褐色のシルト（第2段の植物物）に連続する可能性が高い。されど、その上位に位置する暗褐色の砂礫層とシルト（第2段の層理物）と暗褐色のシルト質砂礫（図5）は、それまでの1区の暗褐色砂質層とシルト（第2段の層理物）と暗褐色シルト質砂礫（図5）につながる。

#### 5) 地形面積の変遷

これまでに述べた事柄から次のように地形面積が確認される。

【ステップ1】 調査区附近では、辻川の直角なる渓谷によって北に砂礫が埋積した。これによって、宮ノ前向日道跡と同じ時期に扇状地が発達し、1区東半部から1区にかけて中層が削成された。

【ステップ2】 1区では、辻川の砂礫が残り、シルトが砂質地帯を多く埋積した。一方、1区では辻川の砂礫を主流が中層層や下層層を経て地盤上に運搬した。この直路はその砂礫層や埋積じき砂質シルトなどによって埋積された。

【ステップ3】 辻川が南北変更によって1区の西半部を2度削下した。最初は、1区西半部のほぼ全層に埋積が削成され、これを埋積したシルト質砂礫はその埋積が19世紀半ばの耕作面上にまで進んだ。1区間の削下は19世紀後半である。この直路もシルト質砂礫によって埋積された。

【ステップ4】 調査区附近には、渓水の発生しない記述した埋積が認められ。こうした環境下で表土の土壤化が進み、1区西端では暗褐色のシルトが形成された。この埋積は同じ時期に小川通路跡と宮ノ前向日道跡と1区でもみられた。

【ステップ5】 シルトやシルト質砂礫などは、辻川による敷地の渓水に伴って堆積し、灌漑地上を埋った。

その結果、1区埋積と1区周辺はほぼ完全に埋積した。その最も1区の埋積が耕作上では、19世紀末～19世紀に

而立社社物が、重文即ち紀には櫛形遺物が建てられた。

[スライド 6] 11世紀以降には、辻川が氾濫し、シルトの堆積があつた。その後、調査対象の地形圖（平野）は辻川の下流によって変化した。

### 3. 周わりに

小中筋谷口道路、宮ノ前町内道路、自上り井ノ上町内、坪道路辻川山丘施設部の辻川に沿う平野に位置する。この平野に自、定期便往復、運送船渠、ならびに定期性屋敷地が認められる。これらのうち小中筋谷口道路の調査区は交通性居候地に、また宮ノ前町内道路と井ノ上町内ノ坪道路は、11世紀定期便路线上にあつた。

小中筋谷口道路の調査区は定期性屋敷地の理路斜面地上に位置する。この田中地区は、南側の谷から修理とシルト質堤壁が認定されてきたもので、これはその修理性堤壁によって埋められ埋没した。修理斜面地上は堤防より高層であるため、そこには定期便に堤防植物が建てられた。他方、宮ノ前町内道路と井ノ上町内ノ坪道路は定期便河床の末端上に、また他の範囲が定期便の理路斜面地上に位置する。ここでは、定期便河床より堤防より高層に、修理した堤防斜面と定期便の境界付近に修理穴がつくられた。また、田中地区には南から伸びる小規模な支流の定期便がまつ存在する。そのため、田中地区は高層な環境を必要とする耕種地や農場を利用されなかつたと想えられる。

井ノ上町内ノ坪道路の田中地区にも定期便河床が分布し、田中地区から田中地区にかけては修理斜面地上に位置する。計4箇所は定期便の形成期につくられたもので、ついでこれが埋没する過程で辻川の定期便が田中地区に形成された。その他田中地区的修理斜面地上では、目立った人間生活がある跡なかったとのに対して、高層な環境である田中地区的修理斜面地上では、11世紀末～12世紀に定期便植物、12世紀に修理植物が埋没してみえた。さらに、その後の定期便河床に宮ノ前町内道路中段、上町内ノ坪道路の急傾斜する地形面が変化したと見えられる。小中筋谷口道路、宮ノ前町内道路、ならびに井ノ上町内ノ坪道路では、以上のような地形変動、およびそれと人間生活の関係が認められるのである。

### 4.

(1) この定期性屋敷地誕生～アーヴィング～カーラル湖北湖岸研究会を通じてアーヴィング園の～アーヴィング～のものである。

(2) 宮ノ前町内道路田中地区、地下水位が高く、直しい地下水の危険性があつたため、堤防施設を構成する修理植物の深さまで土砂シートを剥離せざりか。



图 10 河南新野县白河乡的中生代地层剖面与第四纪冲积带示意图

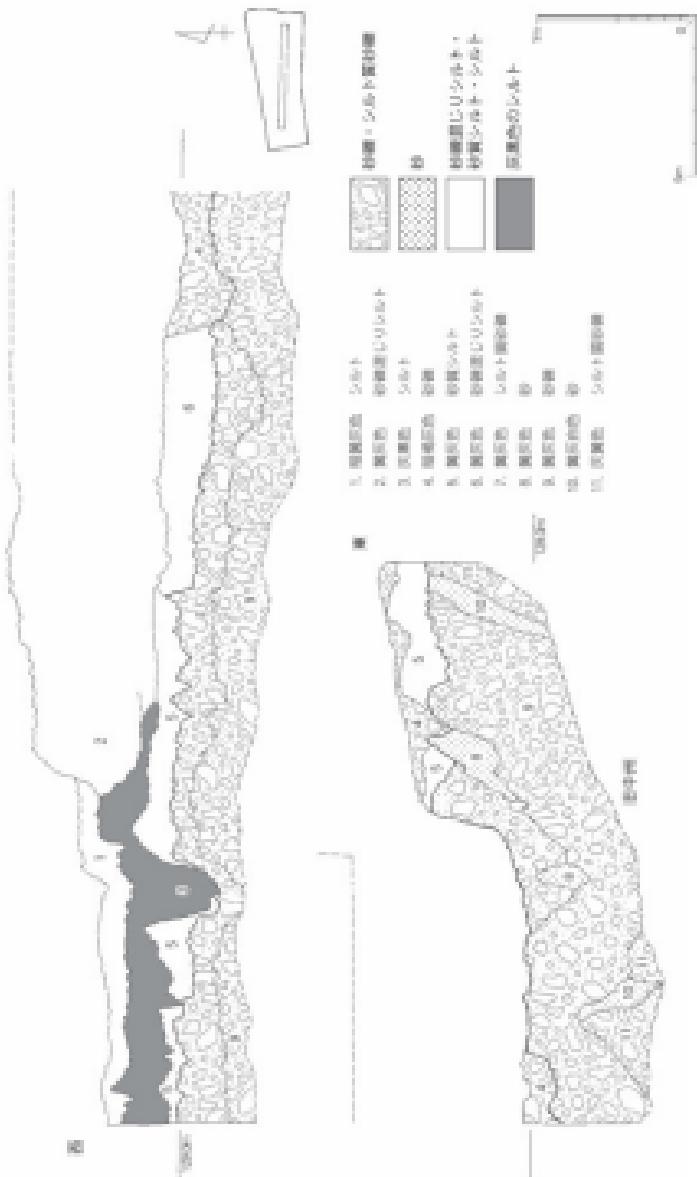




図204 国ノ前向村過目1団における過耕地調査から得られた地形図

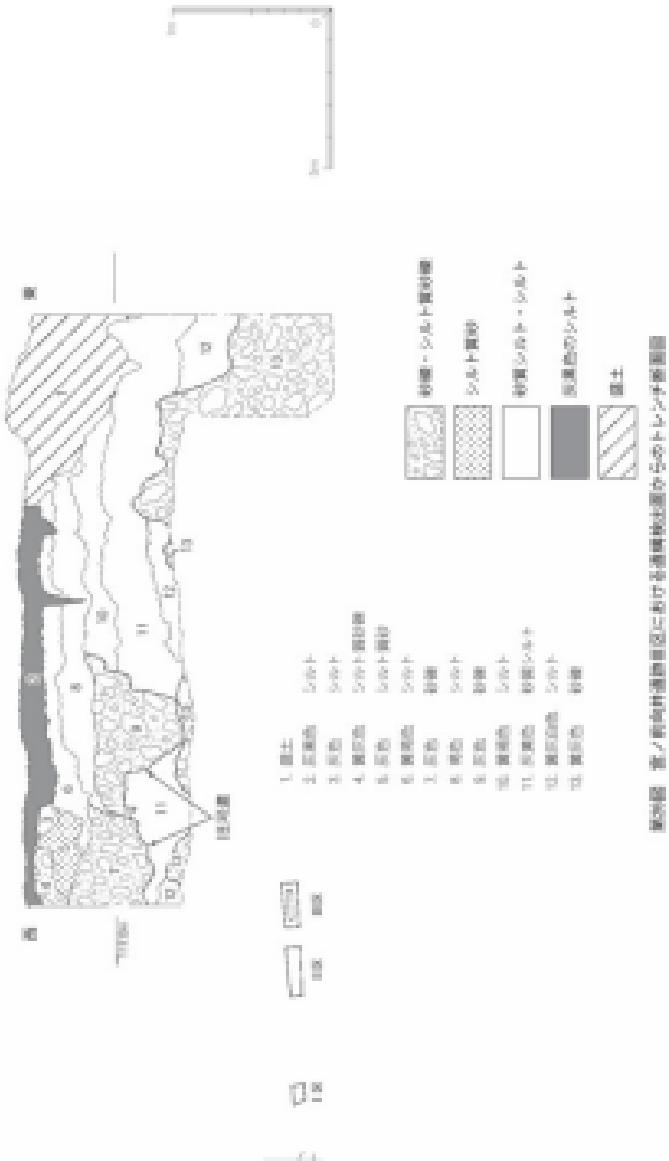
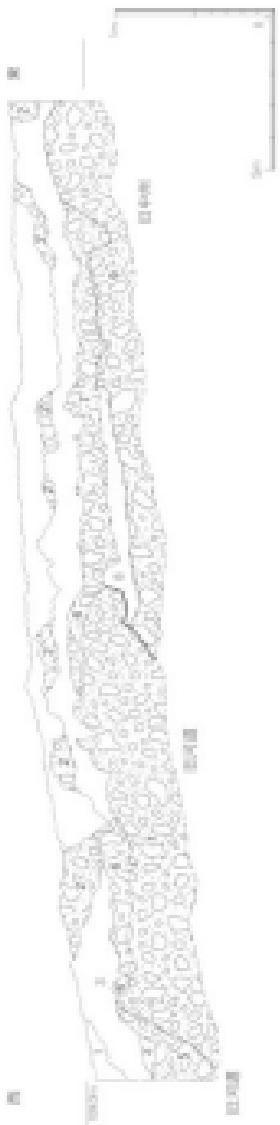
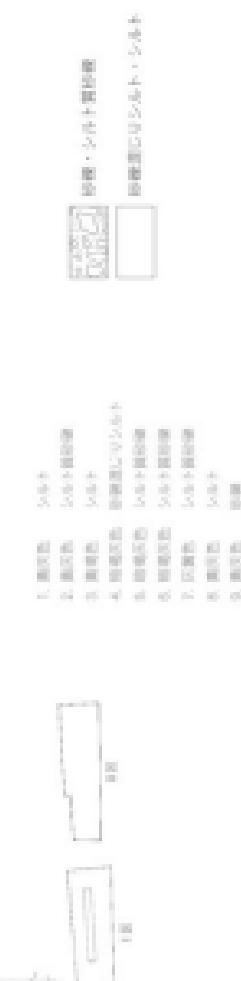


図6-2 宮ノ前町計画調整区域における道路斜面からのトレント遮蔽壁

卷之三





卷之三

## II 宮ノ前向井遺跡から出土した木材・種実遺体の年代

パリノ・サーヴィ株式会社

はじめに

宮ノ前向井遺跡は、鹿児島県鹿児島市近郊吉野（南原）に位置する。地形的には遺跡南部の山地河川により形成された扇状地上に位置し、辻町によって設置化している。今回の試験調査では、トレンチ 1 西から、土坑が検出された。土坑は、直徑約一メートルで深さ約 60cm を有し、深さ 100cm ほどあるが、上面は整備の済みによって覆されている。土坑底部からは堅実層、土坑上部からは土と木材が積上げている。これらの確認状況から、土坑は縄文時代のドメーニ的遺跡の可能性があるが、周辺には縄文時代の遺跡は発見されていない。

そこで、当時の計測調査では、土坑から出土した堅実層および木材の放射性炭素年代測定を行った。土坑の埋蔵年代に関する推測を得る。

### 1. 説明

試料は、トレンチ 調査から検出された土坑底部の堅実層の灰白色から出土した堅実層の種子一枚（面積：足形 1 点・断片 2 点）と、土坑上部の黒色砂土層から出土したカッコ形材 1 点（面積 1）である。なお、各試料について廿年代測定前に種類確認も含めて行う。

### 2. 方針

試料は廿年代測定に種類確認を行う。種類試料は双面清漆接着剤下で観察し、木質試料は刷毛の刃を用いて木口（横断面）、端口（放射断面）、板口（接觸断面）の 3 断面の端子切片を採取し、ガム・クロラーム（日本クロラーム、アクリルゴム接着、ナリセイク、高耐水の液体成）で封入したプレバケートを生物顕微鏡下で観察し、種類同様を行う。同定用の試料は、放射性炭素年代測定の前処理として、顕微鏡等による物質以外のものを簡略化して洗浄する。次に二段階に温められた容器を脱脂して用意し、糊／ナリセイク／顕微鏡処理を行った後、加速器質量分析（AMS）法による測定をする。なお、年代測定はアメリカ合衆国ペータ社の能力を用いた。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5730 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基準とした初期 CDP であり、測定標準偏差 (One Sigma) 95% に相当する年代である。なお、射線校正は、RADOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB-BEVLOC (Copyright 1993-2005 M.Sauer and P.J.Rieser) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

射線校正とは、大気中の CO<sub>2</sub>濃度が一定で半減期が 5730 年として算出された年代値に対して、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の CO<sub>2</sub>濃度の変動、及び半減期の違い (今の半減期が約 5730 年) を校正することである。植物遺体を対象としていることから、北半球の大気中濃度に由来する校正曲線を用いる。

射線校正は、測定誤差が、± 10 倍の値を計算する。± 10 倍的に真の値が範囲内に存在する範囲、± 2 倍の値が範囲外の範囲で存在する範囲である。また、測定の相対比とは、± 2 % の範囲をそれぞれとした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

第4表 放射性炭素年代測定および樹年校正結果

試料名 種類・部位	測定試料 BP	測定試料 年齢 (BP)	測定試料 BP	樹年校正年齢 (cal)				Code No.
				測定 年齢	cal BC 737- cal BC 739	cal BP 1,700-2,000	cal BP 1,600-1,900	
①樹葉 アカギレ 樹冠部	2000±40	-120	2400±40	7.0	cal BC 737- cal BC 739	cal BP 1,700-2,000	cal BP 1,600-1,900	0.307
				7.0	cal BC 739- cal BC 738	cal BP 1,600-1,900	cal BP 1,500-1,800	0.300
②樹葉 アカギレ 樹冠部	2000±40	-120	2400±40	7.0	cal BC 739- cal BC 738	cal BP 1,700-2,000	cal BP 1,600-1,900	0.307
				7.0	cal BC 739- cal BC 734	cal BP 1,710-2,000	cal BP 1,610-1,900	0.310
③樹葉 アカギレ 樹冠部	2000±40	-120	2400±40	7.0	cal BC 739- cal BC 738	cal BP 1,600-1,900	cal BP 1,400-1,700	0.308
				7.0	cal BC 739- cal BC 738	cal BP 1,600-1,900	cal BP 1,400-1,700	0.307
④樹葉 アカギレ 樹冠部	2000±40	-120	2400±40	7.0	cal BC 739- cal BC 738	cal BP 1,600-1,900	cal BP 1,400-1,700	0.308
				7.0	cal BC 739- cal BC 738	cal BP 1,600-1,900	cal BP 1,400-1,700	0.307

- 1) 樹年校正は、2000年を基準とした年齢。放射性炭素の半減期は、2000年も使用した。  
 2) 樹年校正は、cal BC 1,200-1,500年を基に樹年校正範囲の補正を行った年齢。  
 3) 樹年校正は、樹年校正計算した樹年年齢、樹年誤差±(樹年値の4%が入る範囲)を年代値に四捨五入した。  
 4) 計算には、RADON-226 RADON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV04 (Copyright 1998-2000 M. Becker and P.J. Reimer) を使用した。  
 5) 樹年校正年齢の誤差は、測定的に直の値が入る確率が95%の範囲である。2.0の場合はある。  
 6) 樹年校正は、式 (3) の手順を踏んで算出した。確実的に直の値が得られる確率を95%以内に示したものである。

### 3. 結果

放射性炭素年代測定結果および樹年校正結果を表1に示す。土壤底層の被光過体の樹年年代は2400±40 BP、測定誤差を考慮して計算された樹年校正範囲はcal BC 737-738年を示す。土壤上部のミカン園地の樹年年代は2000±40 BP。測定誤差を考慮して計算された樹年校正範囲はcal BC 737-738年を示す。なお、樹葉類および木材は、以下に示す樹木学的特徴から、いすれも常緑樹種のアカギル(Quercus acutissima, cyclobalanopsis)に同定された。

木材：放射孔付近、表面は平滑で堅く、裏面では構造的、半径で放射方向に配列する。直径は平滑孔を有し、壁孔は交互軸に配列する。放射組織は細胞、半円、1→2次細胞のものと複合放射組織となる。木材は、裏面で強度が高い材質である。(平井、1970)

樹葉類：葉先の長さは1.5cm程度。葉身は薄く、先端部分残存している葉脈は少ない。先端部は尖出し、葉脉が網状であるが、かなり葉脉が通んでいる。また表面付着の微弱がある。表面は薄くて堅く、光沢がある。



土壤 (B200) 基土整理種子

#### 4. 判斷

今回調査を行った土崎鹿部の櫛光通跡と土崎上園の土城の断材は、いずれも青垣达磨駒のアカガシ堅固に同定された。施釉無頭架瓦通跡は、上記したように器表範囲内で一致する箇を除しておき、器年代で紀元前1～5世紀頃を示している。

近年、國之歴史民族博物館を中心とした弥生時代の開始年代に関する調査研究に伴い、國文時代晚期～弥生時代の上园付酒井に関する年代説が多面論議されてきている（西本編、2006・2007）。其論題下では、伊丹市白石酒井通跡で國文時代初期の白石酒井式土器が2500土器BP (cal BC 840~720年) から2250土器BP (cal BC 800~740年)、神戸市淡河通跡の佐佐木代前期（Ⅰ期新石器）の土器が2250土器BP (cal BC 840~740年) から2050土器BP (cal BC 780~720年)、神戸市東武連通跡の佐佐木代前期（國內土器式（前）～須貝式）の土器が2050土器BP (cal BC 780~720年)、などの年代説が唱えられている。吉川（2007）は、これらの民族説を含め、近畿地方の年代測定結果を整理し、校正年代で、白石酒井式土器が前1～前2世紀、長原式が前3～5世紀の間のある期間、河内最古の通跡式土器が前1～前2世紀の間のある期間を占めていることなどを示す。通跡式土器と須貝式土器との共存は弥生時代初期の古・中段階を主に、一部は新石器までづること、両者が共存した段階の下限の年代は前1世紀と推定されている。

以上のことを踏まえると、今回の年代測定を行った野瀬谷の可能性がある土城は、國文時代後期頃から弥生時代初期頃までかけて測定したことが想定される。

なお、今回の土城か心出土した空堀里塚はアカガシ堅固の堅打であったが、種の特徴に重要な先駆型の道打特徴がなく、種の特徴に留まらなかった。アカガシ堅固の堅打は、国内に生産する堅打ではイチイガシ以外はアカガシが必要である。時期は異なるが、神戸市淡河通跡で検出されている國文時代後期通跡の堅打類の貯蔵を目的とした土坑では、アカガシ堅固（イチイガシ・アカガシ・トカラシ）が最も多く認め、他にアカガシ、スダリナ、アリ等のアカガシ、堅打類のキヤ、常緑広葉樹のクヌギ等、アバメ等が少數出土しており、アカガシの作業手必要らず、簡便に直角にできるイチイガシ巻生に接觸・吟釈していたことが確認されている（西本、1990）。今回の土城ににおけるアカガシ堅固の堅打判別状況は不明であるが、出土した断材もアカガシ堅固であったことから、当時の人にあってアカガシ堅固を多用させていたことが想定される。

#### 参考文献

- 吉川 西園（2007）近畿における弥生時代の開始年代、「新弥生時代の土城に由り」第1章 国文時代から新弥生時代。
- 西本 喬弘、西園 西園編、P59-55。
- 平野 順二、1991「高の事業」高の事業、かねむ書院。
- 西本 喬弘、西園 西園「新弥生時代の土城に由り」第1章 新弥生時代から新弥生時代へ、西園編、P165。
- 西園 西園、1991「神戸市白石酒井通跡出土の植光通跡、共存観点を曾根吉綱が指摘した『通跡古器物』に伴う理屈」文化財資源調査報告書第一、本庄町通跡1、P94-95、西園編著者著述。

# 報告書抄録

ふりがな	いのくえもりかいたものつぼいせき・みやのまえむかいたせき・こなかおいだにうちのせき							
調査名	井ノ上通り内・中通り・井ノ上通り各口通り							
リマーク番号	古事記文化財調査報告							
著者名	森内 勝造／西本 哲哉／大原洋一・平一也／子岡式会社							
調査期間	成暦2年考古博物館							
所在地	〒630-0047 岐阜県加茂郡福岡町大中1丁目1番1号 TEL. 059-431-5889							
実行機関	成暦2年考古博物館							
所在地	〒630-0047 岐阜県加茂郡福岡町下山手通り3丁目10番1号 TEL. 059-431-7113							
実行年月日	2013年3(平成25年)3月20日							
所保資料名	所在地	井ノ上 通り内・井 通り	北端 東端	西端 東端	西端 東端	西端 東端	調査場内	
井ノ上通り 西端・井 通り	岐阜市上石 守町筋4番 地ノ上 平成22年3月	200221	2002084	35歳 660 419	35歳 290 179	平成14年 5月21日～ 平成14年 1月6日	1,200m <sup>2</sup>	一般国道24号 日置バイパス 道路改築事業
井ノ上通り 東端	岐阜市 井ノ上 平成22年3月 下春ノ日	200221	2002083	35歳 310 469	35歳 290 229	平成14年 5月21日～ 平成14年 1月6日	2,000m <sup>2</sup>	一般国道24号 日置バイパス 道路改築事業
小中通り各口 通り	岐阜市小中 字通路口	200221	2002085	35歳 310 469	35歳 300 179	平成14年 5月21日～ 平成14年 1月6日	500m <sup>2</sup>	一般国道24号 日置バイパス 道路改築事業
所保資料名	種類	出土時代	出土遺物	出土遺物	出土遺物	出土遺物	出土遺物	
井ノ上 通り内・井 通り	発掘址	昭和～ 平安時代後期	陶瓦柱礎物	陶瓦柱礎物	土器	土器	瓦器	
井ノ上通り 東端	発掘址	平安時代後期～ 平安時代前期	野體瓦	野體瓦	土器・石器・空洞種子	土器	瓦器	
小中通り各口 通り	発掘址	縄文時代	陶瓦柱礎物	陶瓦柱礎物	瓦器	瓦器	瓦器	
調査名	成暦2年考古博物館に伴って丁道跡の発掘調査を実施した。井ノ上通り内・井通りは3世紀後半から10世紀前半にかけての割溝道路で、駆け足運行の様子が見出されている。井ノ上通りは南北道路は南北歩行階層として南北歩行空間の道路で、アーチドアを設けた土蔵も発見されている。アーチドアは3段の土蔵段階の南北歩行空間の結構が設けられている。小中通り各口通りは縄文時代前半解説の栗塚道路で、陶瓦柱礎物と被覆瓦層が見出されている。							

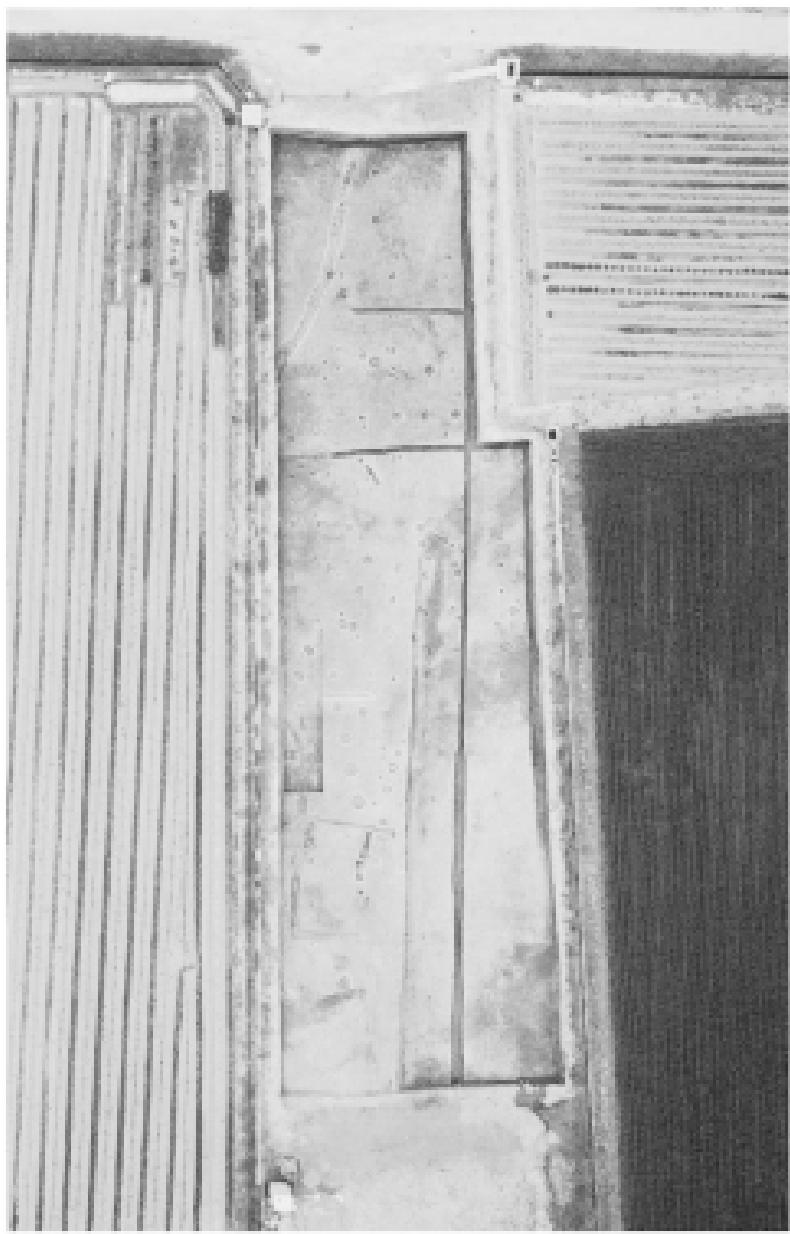
# 写 真 図 版



## 航空写真



井ノ上森境内ノ坪道跡日区



全貌（西側）

## 井ノ上森境内ノ坪道跡日区

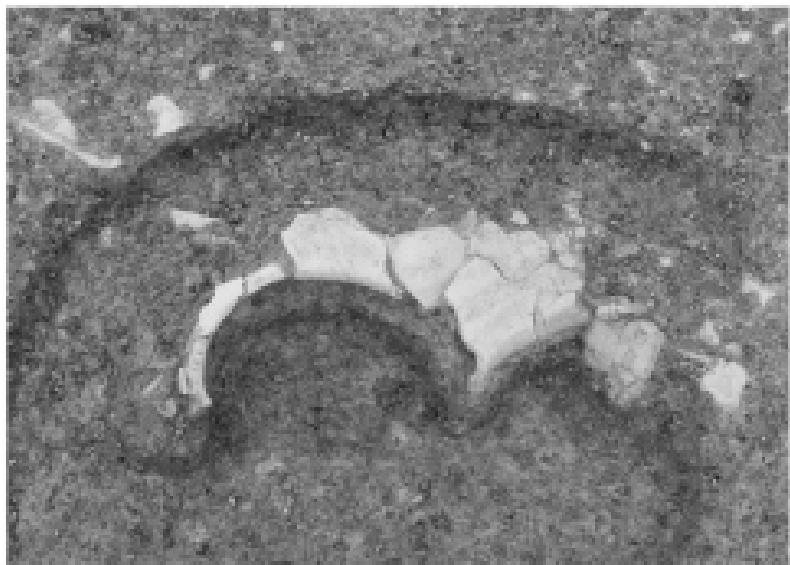


a 全景 (西から)



b 全景 (東から)

井ノ上森境内ノ坪道跡Ⅱ区



a 580Ⅰ土器出土状況（東から）



b 580Ⅱ土器出土状況（西から）

## 井ノ上森境内ノ坪道跡日区



a 5801 a・b (西0.5)



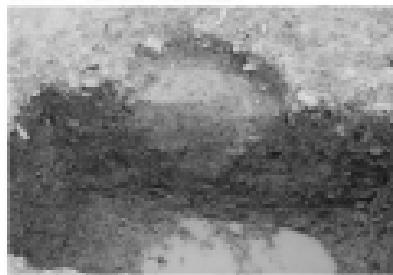
b 5802 (西0.5)



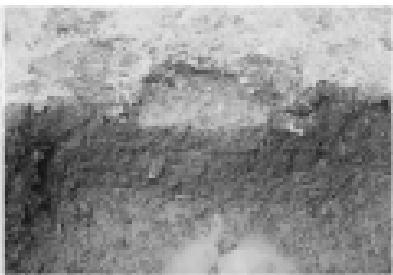
c 5802 (東0.4)

## 井ノ上森境内ノ坪道跡日区

SP01 n・N社大断面取り断面 1



a SP01



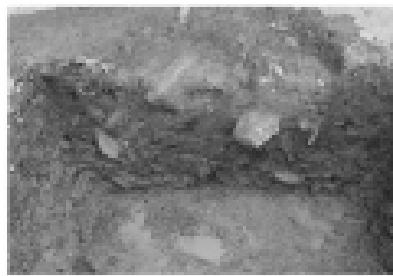
b SP02



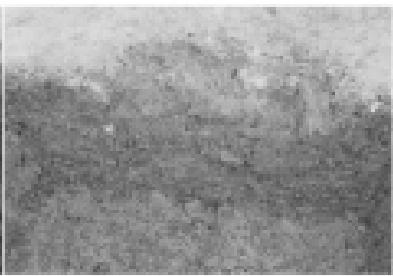
c SP03



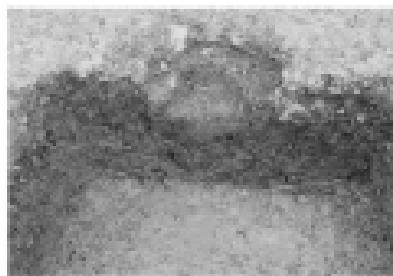
d SP04



e SP09 + SP14



f SP10



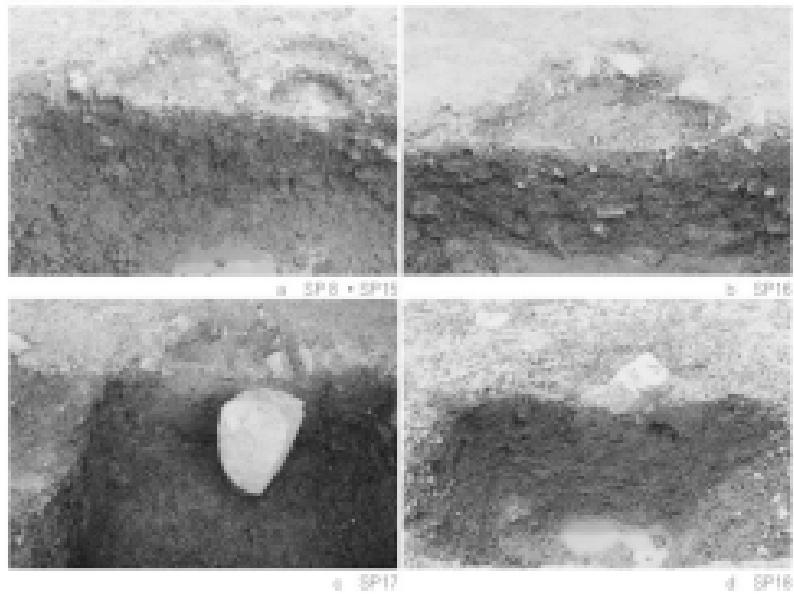
g SP11



h SP12

## 井ノ上森境内ノ坪道跡日区

8001 m・6社穴断面観察写真

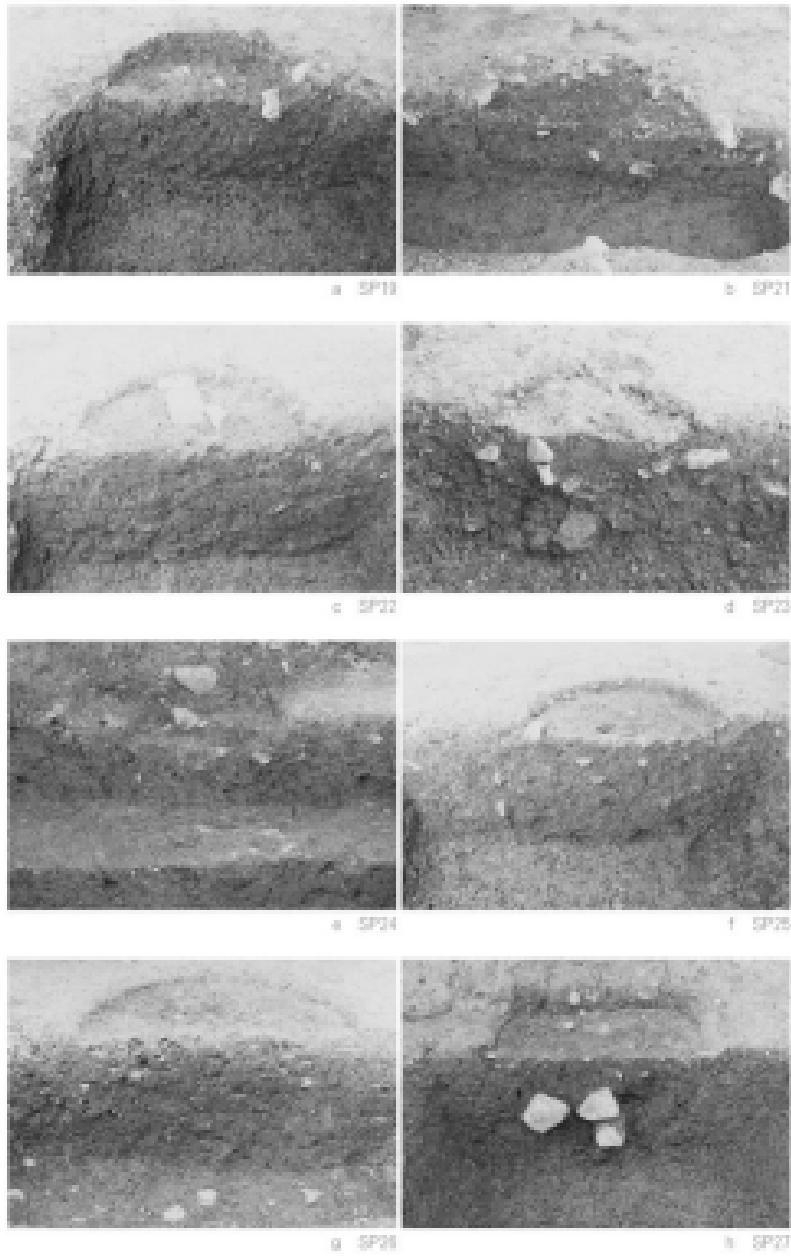


8000坪穴断面観察写真



## 井ノ上森境内ノ坪道跡日区

8000往六断ち割り断面



## 宮ノ前向井遺跡



a 5X01-82 (奥から)



b 5X01 (奥から)



c 5X02 (奥から)

小冲道谷口遺跡



全貌 (仰拍)

小冲道谷口遺跡



a 全景 (西から)

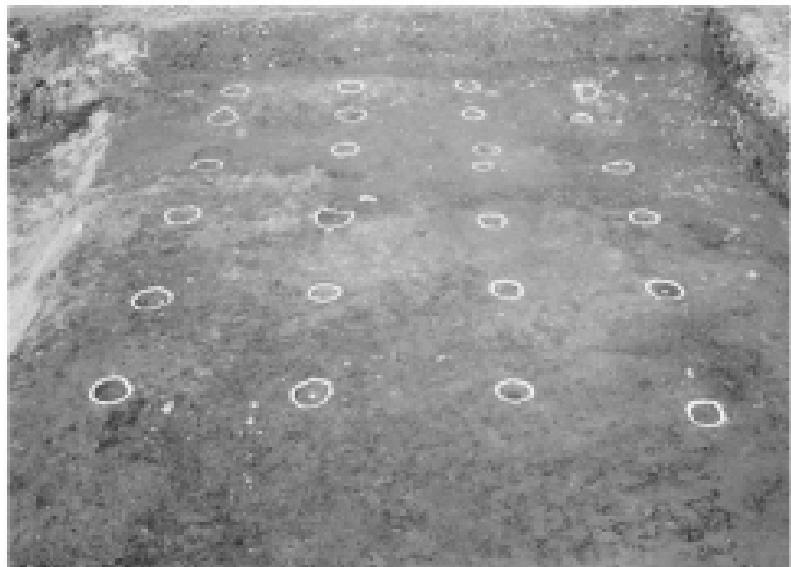


b 全景 (東から)

小冲道谷口遺跡



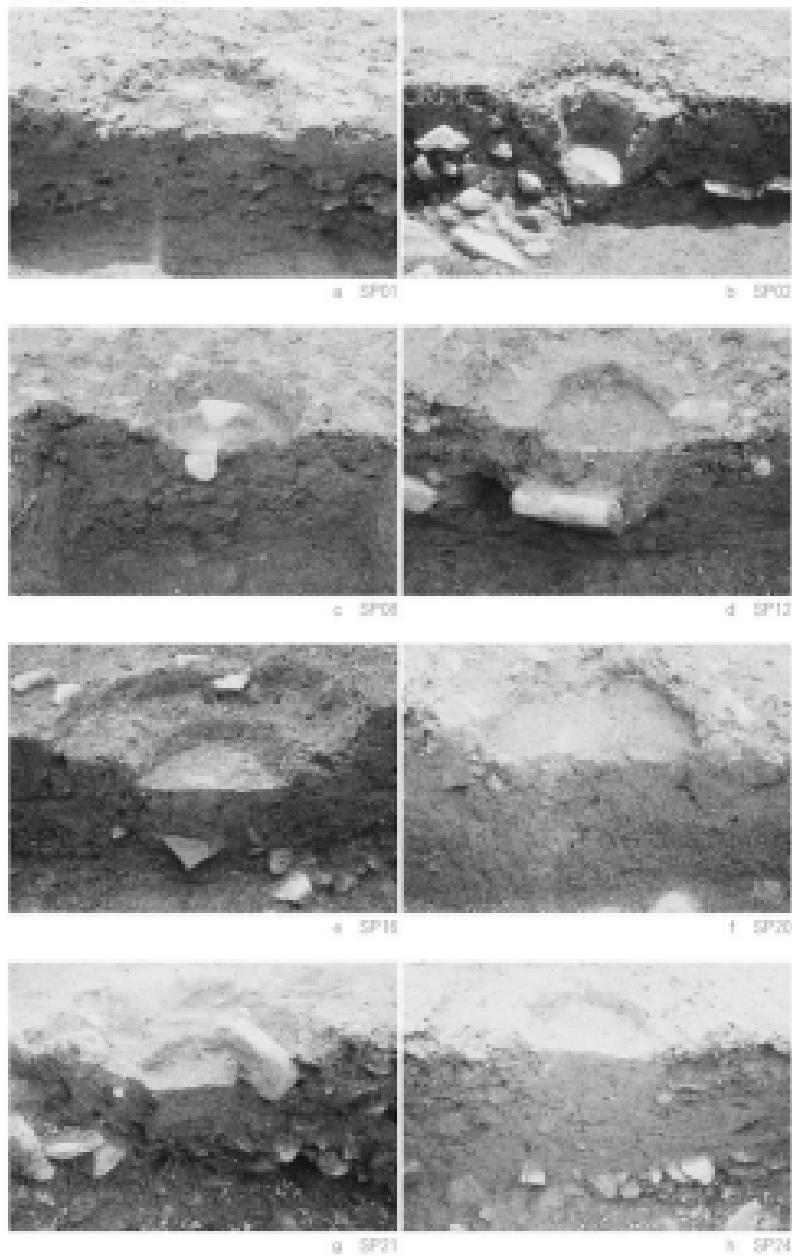
a 8801 (119-5)

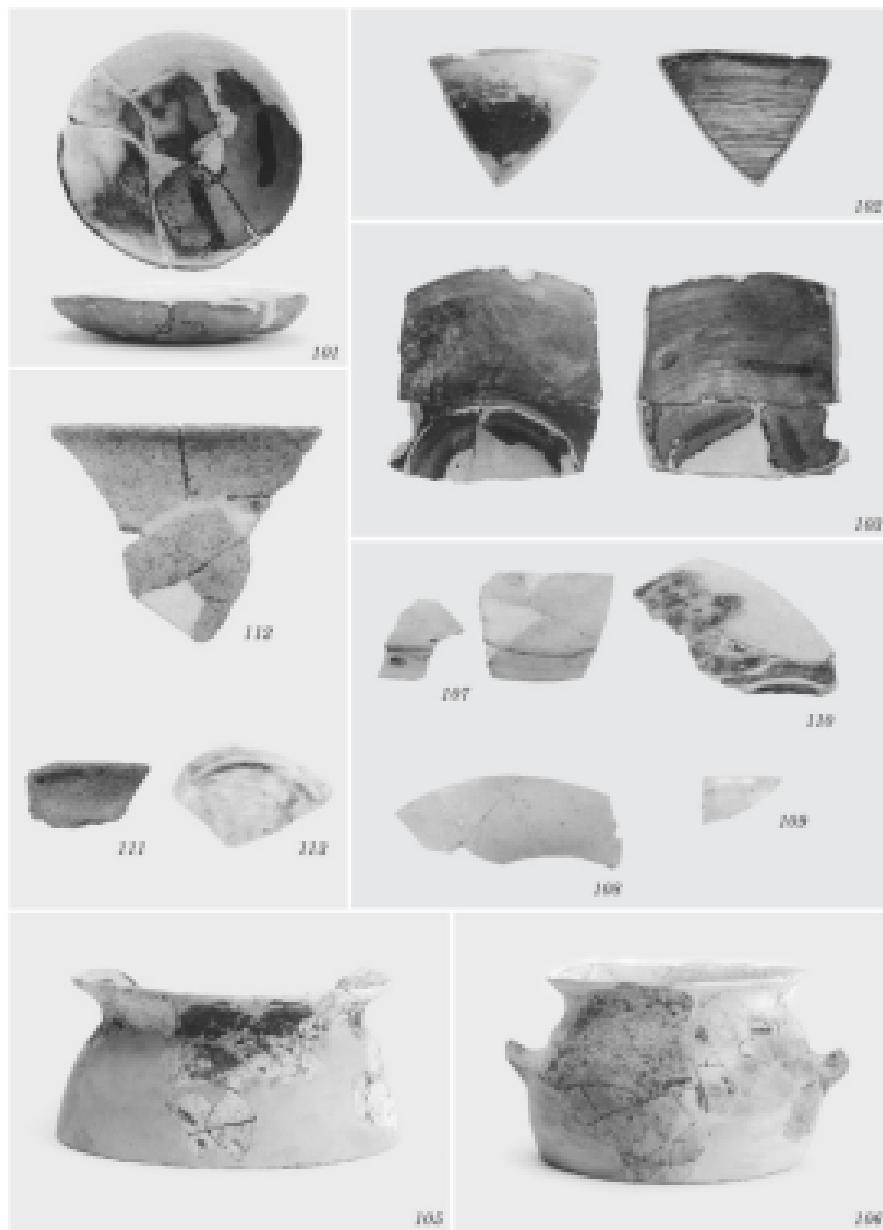


b 8801 (119-5)

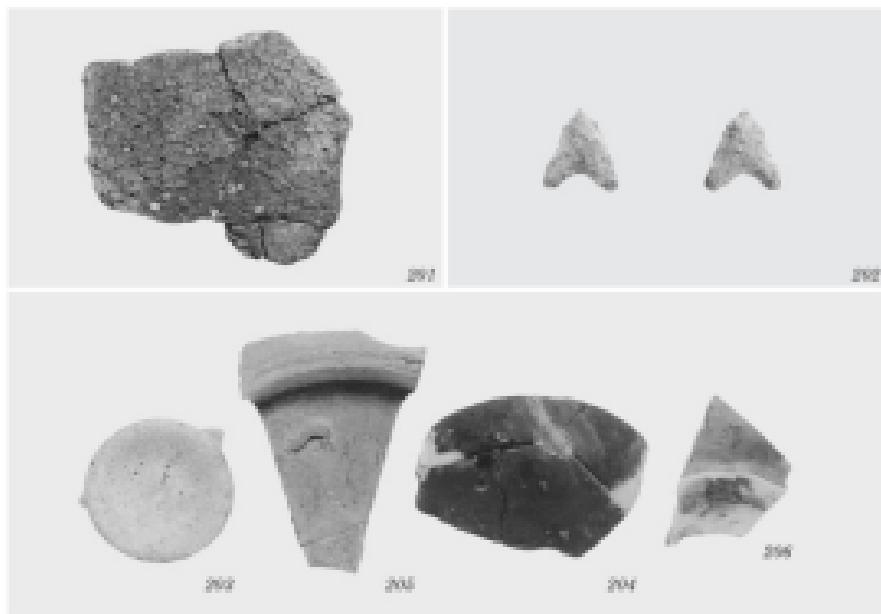
## 小冲通谷口遺跡

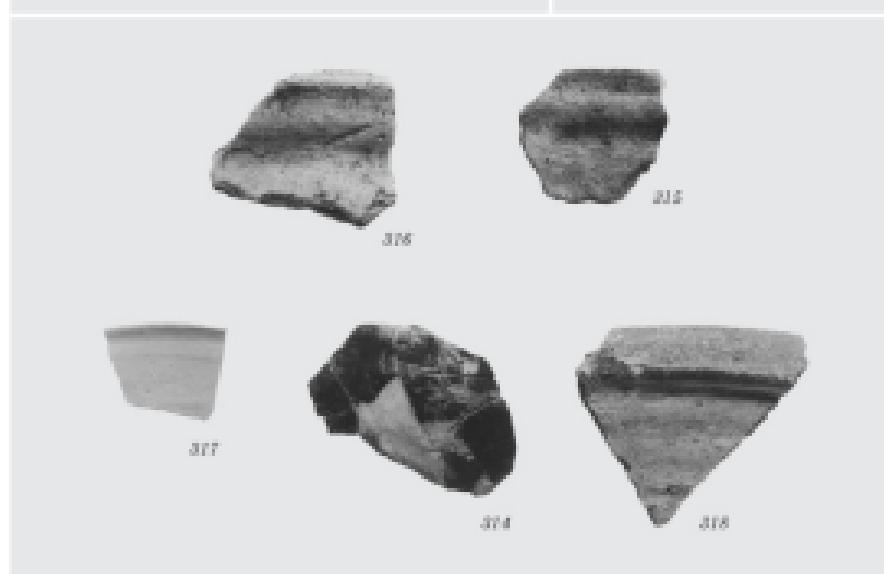
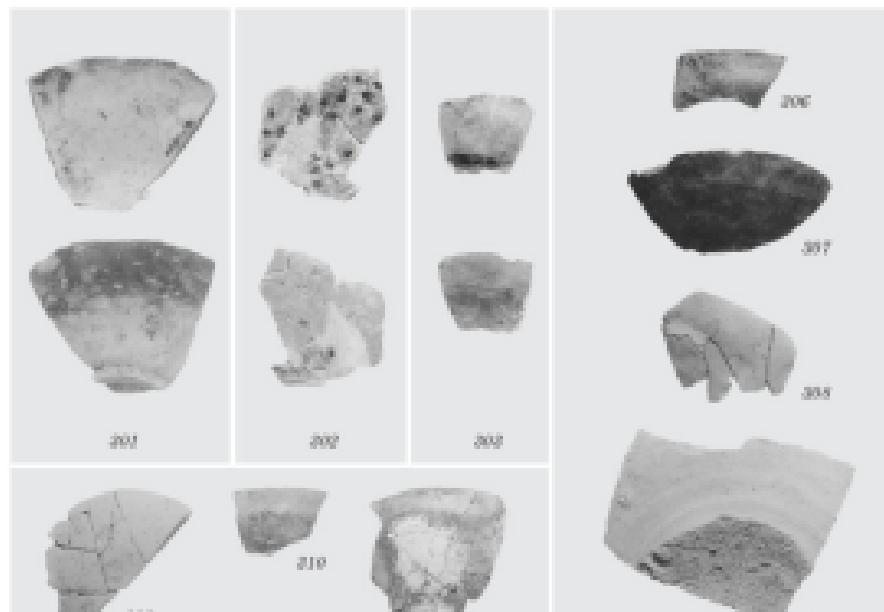
SPO1柱穴断面と割り断面





## 窖 / 前向井道砖出土遗物





長崎県文化財調査報告 第368号

## 井ノ上森垣内ノ坪遺跡 宮ノ前向井遺跡 小中迫谷口遺跡

平成21年1月20日施行

調査者：長崎県立歴史博物館  
〒850-0842 長崎市中央区下山手通3丁目1番1号  
TEL 095-837-3282

実行者：長崎県教育委員会  
〒850-0842 長崎市中央区下山手通3丁目1番1号  
TEL 095-341-7711

図面：株式会社アート・エイ  
〒850-0808 長崎市西彼杵町6-6

